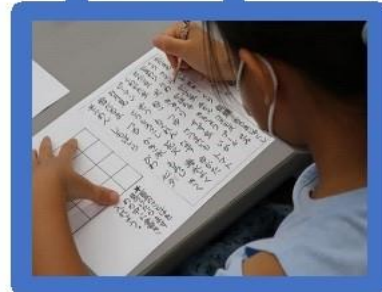


令和5年度 研究報告書

# 子どもの声から不登校を考える

～子どもの成長を応援する関わりをするために～



認定特定非営利活動法人

教育活動総合サポートセンター



**令和5年度 研究報告書**

# **子どもの声から不登校を考える**

～子どもの成長を応援する関わりをするために～



**認定特定非営利活動法人  
教育動総合サポートセンター**

# 目次

* はじめに	1
I 研究の概要	
1. 研究テーマ設定まで	3
2. 研究体制	8
II 子ども・保護者アンケート	9
1. こどものアンケートから	
2. 保護者のアンケートから	
III 実践事例	21
1 興味が広がり、自ら動き出す(中学2年)	22
2 「今回のテストは手ごたえがあった」と語り始めた(中学2年)	24
3 1人で通所し、元気に学習するようになった(中学1年)	26
4 「僕の話どう思う?」と聞いてきた(中学2年)	28
5 自分の思いを少しずつ口にするようになってきた(小学校高学年)	30
6 「人と話すのは得意です!」(中学2年)	32
7 「これ、なんだっけ?」と言えた!(中学1年)	34
8 「ここがわからない」と言うようになった!(中学1年)	36
9 「やめたい!!」と訴える(中学3年)	38
10 ミニ事例 子どもの声とスタッフの思い	40
IV 研究のまとめ	43
1. 2年間をふり返って	
2. 今後の課題	
◆研究経過/研究協議会の委員	46
..... サポートセンターの活動紹介 .....	
1 サポートセンターの研究の歩み	49
2 子どもへの学習支援・居場所づくりの活動	52
・こどもサポート宮ノ下      ・こどもサポート南野川      ・こどもサポート旭町	
・のびのびファーム      ・ふれあい体験活動	
・生活に困っている家庭等の子どもへの学習支援      ・地域の寺子屋	
・外国につながる子ども向け寺子屋      ・たのしいキッズセミナー	
・サイエンスキッズ      ・出前科学教室	
3 保護者を支援し、連携する活動	69
・不登校に悩む保護者と子どもへの教育相談      ・中原区保護者ミーティング	
・支援を必要とする子どもの保護者の会      ・不登校相談会・進路情報説明会	
4 教職員・市民等を対象にした活動	73
・文化講演会      ・不登校シンポジウム      ・教育課題研修会	
・臨時的任用教員研修等へのサポーター配置	
・学校への教育サポーター等の配置      ・大山街道ふるさと館の管理運営	
・こども文化センターの環境整備      ・川崎市教育会館の管理運営	
* サポートセンターを支えて下さっている方々/サポートセンター会員	82
* おわりに	84

## はじめに

本サポートセンターが、この2年間にわたる研究を始めた時に、我が国の教育にかかわる法律や施策に大きな動きがありました。それは、2023（令和5）年4月1日、子ども施策の一元化をねらいとした「こども家庭庁設置法案」及びあらゆる子ども施策の基盤となる基本理念を定めた「こども基本法」の施行です。

日本においては1994（平成6）年の子どもの権利条約批准以来、これまで国内で条約に対応した包括的な基本法、および子どもの権利擁護に対する横断的な行政機関はありませんでした。こども家庭庁は、その任務として「子どもの権利利益の擁護（第3条）を明記し、こども基本法は「児童の権利に関する条約の精神にのっとり（第1条）」と規定し、かつ、子ども施策の基本理念について「すべての子どもについて、個人として尊重されその基本的人権が保障される（第3条）」ことをうたっています。こうした流れを受けて文部科学省では、いじめ、不登校、児童生徒の自殺の増加など生徒指導上の課題が深刻化する中、生徒指導上の基本書となる『生徒指導提要』を12年ぶりに改訂し、2022（令和4）年12月に公表しました。『生徒指導提要』の前文の中で、「（前略）何よりも子どもたちの命を守ることが重要であり、全ての子どもたちに対して、学校が安心して楽しく通える魅力ある環境となるよう学校関係者が一丸となって取り組まなければなりません。その際、事案に応じて、学校だけでなく、家庭や専門性のある関係機関、地域などの協力を得ながら、社会全体で子どもたちの成長・発達に向け包括的に支援していくことが必要です。」と述べ、さらに、「生徒指導の取組上の留意点（P32～P33）」の項目では、「生徒指導を実践する上で、児童の権利条約の四つの原則を理解しておくことが不可欠です。」として、次のような原則が書き込まれています。

- ① 児童生徒に対するいかなる差別もしないこと。
- ② 児童生徒にとって最もよいことを第一に考えること。
- ③ 児童生徒の命や生存、発達が保障されること。
- ④ 児童生徒は自由に自分の意見を表明する権利を持っていること。

平成28年12月に公布された「教育機会確保法」によって、不登校の児童生徒に関する認識が大きく変わりました。今回の「こども基本法の施行」「生徒指導提要の改定」は、学校教育や関連する子ども教育施設に携わる人々の「子ども観」「教育観」の大きな転換点になると思います。

一方、サポートセンターが主催した今年度の「不登校シンポジウム」には、保護者から、次のようなアンケートが寄せられていました。「『不登校を問題行動ととらえてはいけない』という

話があったが、みんな『不登校には課題がある』と感じているから、本日のようなシンポジウムがあるのだと思う。その課題は『学校に行くこと』によって解決するわけではない、『学校に行かなければ』解決したともいえない。それでは、私たちは、何を目指していくことが大切なのかについて考えていきたい」というものでした。学校に登校するという結果のみにとらわれることではないが、それでは、自分の子どもの「学業の遅れや社会的自立のリスク」にはどう応えればいいのかという大きな問いかけだと思いました。子どもたちからたくさん寄せられたアンケートの中にも、「中学生になり、親の言うことが少し理解できるようになり、心配かけて申し訳ないと思う」「先のことも考えられない。なかなか変わらない自分が嫌いです」「前よりは変わったと思うが、自信がないのは変わらない」などという子どもたちからの切実な言葉が目にとまりました。

私たちは、こうした保護者や子どもの声を受け、今年度も、昨年度に引き続き「子どもたちの声を聞きながら」、「子どもの成長を応援していくため」にどうあったらよいか、具体的な実践に基づく研究を続けてきました。私たちの実践は、「たった一人であろうと困っている子どもがいたらその子を取り残してはいけない」という信念に基づいています。それが教育活動総合サポートセンターを設立した20年前の趣旨であると思います。どうぞ、私たちの研究報告会に参加し、研究報告書をお読みにになり、そして忌憚のないご意見をお寄せください。

最後になりますが、本研究に当たり、きめ細かなご指導をいただいた横浜国立大学名誉教授岡田守弘様や、貴重な資料を提供してくださった川崎市教育委員会、川崎市総合教育センター等の関係機関の皆様にご心より感謝申し上げます。

認定特定非営利活動法人  
教育活動総合サポートセンター  
理事長 山田 雅太

この報告書に記載されている事例、アンケート調査の内容につきましては、個人が特定されやすいという面があります。他の出版物等の転載を控えていただくようお願い申し上げます。

# 研究テーマ 子どもの声から不登校を考える

～子どもの成長を応援する関わりをするために～

## I 研究の概要

### 1 研究テーマ設定まで

令和4年6月の「不登校に関する調査研究協力者会議報告書」において、「不登校児童生徒の実態把握に関する調査報告書（令和3年10月）」（以下実態把握調査）が公表されました。調査自体は令和2年12月1日から28日まで、小学6年生・中学2年生とその保護者を対象に行われたものです。令和元年度に不登校であった者で、調査期間内に学校に登校または教育支援センターに通所実績がある者を対象にしています。全国で29万人を越す不登校の実態からみて、小学6年生と中学2年生だけで十分と言えるのでしょうか。また、調査期間内に登校または通所をしていない子どもは対象外としていますが、それでよいのでしょうか。そんな疑問を抱きながらも、この調査には大きな期待を持ちました。なぜなら、「子どもの声を聞く」ということは、私たちが令和元年度から2年度の研究で取り組んだことでもあり、子どもの声を聞くことがとても難しいことであることを実感していたからです。「子どもの声を聞く」と言っても、どう聞けばよいのか、子どもを傷つける恐れはないのか、聞いたことをどう受け止めればよいのかなど、わからないことばかりでした。そもそも聞いてよいものかという迷いもありました。当サポートセンターに通う子どもの中には、「学校」や「勉強」という言葉に触れただけで来なくなってしまう子どももいます。はたして文部科学省はどんな聞き方をするのか、私たちはその点にも注目しました。

文部科学省の実態把握調査は、質問紙を送って回答してもらう形で行われました。回答数は小学生が713件、中学生が1303件。回答率は、小学生が11.7%、中学生が8.2%でした。この数字をどう見るか、様々な見方があると思いますが、直接子どもに聞くことの難しさが表れていると思います。回答しなかった子どもたちは、どんな思いを持っているのでしょうか。回答しないのではなく、「回答できなかった」とすれば、どういう状況にあったのだろうかなど、いくつか疑問に思うことがあります。従来の「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」が学校に回答を求めているのに対して、直接子どもと保護者に聞いている点でとても画期的なことでした。調査項目も、従来とは比較にならないほど、きめ細かいものになっています。その中で、私たちが最も関心を持ったものは、不登校要因を「最初に行きづらいつと感じ始めたきっかけ」と「最初のきっかけとは別の学校に行きづらくなる理由」とに分けて聞いている点です。私たちも、平成元・2年度の研究で、不登校のきっかけと「その後不登校が続く要因」とに分けて考えてきました。たとえば、ちょっとしたからかいを受けて学校に行きにくくなり、徐々に不登校になった場合、不登校の要因を「からかい」とするだけですませず、他に不登校が続いている要因があると考えer必要があるでしょう。こうした経緯から、文部科学省が初めて行った実態把握調査に私たちの関心が集まったのです。次がその実態把握調査の結果です。



## 最初に行きづらいつ感じ始めたきっかけ（複数回答）

文部科学省の実態把握調査から

小学生（上位7項目）	
先生のこと（先生と合わなかった 先生が怖かった 体罰があったなど）	29.7%
身体の不調（学校に行こうとするとおなかが痛くなったことなど）	26.5%
生活リズムの乱れ（朝起きられなかったなど）	25.7%
きっかけが何か自分でもよくわからない	25.5%
友達のこと1（いやがらせやいじめがあった）	25.2%
勉強がわからない（授業がおもしろくない 成績がよくなかったなど）	22.0%
友達のこと（1以外）	21.7%
中学生（上位7項目）	
身体の不調（学校に行こうとするとおなかが痛くなったことなど）	32.6%
勉強がわからない（授業がおもしろくなかった 成績がよくなかったなど）	27.6%
先生のこと（先生と合わなかった 先生が怖かった 体罰があったなど）	27.5%
友達のこと（1以外）	25.6%
友達のこと1（いやがらせやいじめがあった）	25.5%
生活リズムの乱れ（朝起きられなかったなど）	25.5%
きっかけが何か自分でもよくわからない	22.9%

ここでは無回答を含め、21項目の中から、小学校、中学校それぞれ上位7項目を取り出してみました。数字に多少の違いがありますが、「先生のこと」「身体の不調」など、小学校、中学校とも同じ項目が並ぶ結果となっています。「嫌がらせ」や「いじめがあった」との回答も25%ほどありました。また、「きっかけが何か自分でもよくわからない」という回答が、小学校で25.5%、中学校で22.9%という数字も注目すべきです。不登校の要因は複雑で、子ども自身、特定することが難しいようです。また、コロナ禍以来、不登校の実態も複雑さを増しています。他の項目を選んでいる子どもでも、自分でよく分かって選んでいるかは疑問です。同じ項目を選んだ子どもでも、選んだ背景は個々に異なっているとされます。そのため、子どもの回答を鵜呑みにすることはできないのです。

文部科学省の実態把握調査では、「最初に行きづらいつ感じ始めたきっかけ」に続き、「最初のきっかけとは別の学校に行きづらくなる理由」を聞いていますが、次がその結果です。回答は、無回答（小学校1.3% 中学校1.1%）やその他（小学校7.5% 中学校8.2%）を含め21項目に分けられますが、その中で小学校、中学校それぞれ上位7項目を挙げると次の通りです。



**最初に行きづらいつ感じ始めたきっかけとは別の学校に行きづらくなる理由**  
(複数回答)

文部科学省の実態把握調査から

小学校（上位7項目）	
勉強が分からない（授業がおもしろくない 成績がよくないなど）	31.4%
先生のこと（先生と合わなかった 先生が怖かった 体罰があったなど）	27.0%
生活リズムの乱れ（朝起きられなかったなど）	27.0%
インターネット、ゲーム、動画視聴、SNS などの影響 （一度始めるとやめられなかった、学校に行くより楽しかったなど）	25.2%
友達のこと1（いやがらせやいじめがあった）	23.0%
身体の不調（学校に行こうとするとおなかが痛くなったなど）	22.6%
友達のこと（1以外）	22.1%
中学校（上位7項目）	
勉強が分からない（授業がおもしろくない 成績がよくないなど）	41.8%
生活リズムの乱れ（朝起きられなかったなど）	34.9%
友達のこと1（いやがらせやいじめがあった）	32.9%
身体の不調（学校に行こうとするとおなかが痛くなったなど）	29.0%
先生のこと（先生と合わなかった 先生が怖かった 体罰があったなど）	25.3%
インターネット、ゲーム、動画視聴、SNS などの影響	23.3%
部活動の問題（部活動に合わなかった 友達とうまくいかなかったなど）	19.2%

これを見ますと、最初のきっかけを聞いたときの回答と同じものがあり、きっかけとなったことが依然として解消していないことがわかります。その上で、インターネットやゲームなどの理由の割合が増えています。また、「勉強が分からない」が、小学校、中学校ともトップになっている点が興味深く感じられます。学校に行っていないことで、勉強が遅れる、分からなくなるということになり、それが登校を妨げる要因になっているようです。これは、私たちが令和元・2年度に「不登校が続く要因」として取り上げたことと重なってきます。多くの子どもは、勉強が分かるようになりたいと思っています。不登校の子どもにとって、学習支援が重要な支援の一つであることがわかります。

これに対して、次の表は令和5年10月16日に川崎市教育委員会から公表された「川崎市の令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」結果の中で、不登校の要因とされるものです。

「川崎市令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」から

不登校 の要因	学校に係る状況									家庭			本人		左記に該当なし
	いじめ	友人関係	教職員との関係	学業の不振	進路に係る不安	クラブ・部活	学校のきまり	入学・転編入学	生活環境の変化	親子の関わり方	家庭内の不和	び・非行 生活の乱れ・遊	無気力・不安		
小学校	①	0	69	19	57	1	1	14	36	27	170	10	105	619	16
	②	0	48	28	106	3	0	22	9	16	151	6	113	123	
中学校	①	0	122	13	91	17	16	48	55	37	47	12	222	978	14
	②	0	77	8	123	8	11	30	24	28	62	14	141	159	

① 主たるもの ② 主たるもの以外 —川崎市教育委員会— 令和5年10月16日

この調査は従来から行われているもので、文部科学省が各学校に報告を求めたものです。不登校については、小学校の不登校児童数は1144人で前年度から197人増加しています。中学校の不登校生徒数は1672人で前年度から166人増加しています。

川崎市の調査結果では、不登校の要因として本人に係るものが多く、中でも「無気力・不安」が最も多くなっています。これに対して、文部科学省の実態把握調査では、「先生のこと」や「身体の不調」が上位を占めています。「教職員との関係」や「いじめ」についても、文部科学省の実態把握調査とは違いが見られます。調査の手法が異なっていることから両者を比べることはできませんが、子どもの声と学校の認識との間にはかなりの違いがあると考えてよいと思います。この違いを、どう考えればよいのでしょうか。不登校と関係があるのでしょうか。この違いなぜ生まれるのでしょうか。

文部科学省が行った実態把握調査で、回答を寄せなかった小学生88.3%、中学生91.8%の子どもたちはどう考えているのでしょうか。調査自体に抵抗感を抱いたり、心を閉ざしたりしている子どももいるかもしれません。こうした子どもたちの声はどうなるのでしょうか。私たちは話し合いを重ね、改めて子どもの声を聞き、不登校を考えてみよう、研究テーマを「子どもの声から不登校を考える」と設定することにしました。私たちのもとに通う子どもの中には、「特に理由はない」という子どもがいます。「学校も嫌いではない、友だちもいる」と言う子どももいます。どこまでが本心なのだろうかと思うこともあります。本人が望まない支援をして、自立を妨げている場合はないだろうかなどと考えることもあります。ただ、子どもの声を聞くだけで終わってはいけないことは確かです。その思いをこめて、サブテーマ「子どもの成長を応援する関わりをするために」を設定し、研究期間を2年間としました。昨年度は、子どもの声をできるだけ多く集めることに努め、研究部員が実践事例を持ち寄り、日常の関わりの中で聞こえた声について検討しました。子ども対象のアンケートも検討しましたが、実施は見送り、こどもサポートのスタッフと保護者を対象にアンケート調査を実施しました。それぞれが耳にしている子どもの声を拾うためです。

保護者アンケートは、こどもサポートに通っている子どもの保護者102名を対象に行い、44名の方から回答を寄せていただきました。文部科学省の実態把握調査を参考に、保護者が不登校についてどんな考えを持っているのかを聞いてみました。その結果、不登校要因については、学校に関するものが39%、

本人に関するものが25%で、これは文部科学省の調査結果とほぼ同じでした。学校に対する考えを聞いたところ、「子どもに合ったところで学ばせたい」が52%、「学校には無理に行かなくてもよい」が18%、「やはり学校には行ってほしい」が同じく18%という結果でした。「一つに決められず、どの気持ちもあります。」との記述もありました。保護者の思いは簡単に割り切れるものではないのでしょうか。相談できる場所や相手を持っているかという問いには、「持っている」という回答が84%、「持っていない」という回答が16%でした。文部科学省の調査結果では、小、中学生とも支援機関の利用は40%未満となっていますので、84%はとても高い数字です。当サポートセンターとつながっている保護者が回答していることから高くなるのは当然ですが、「持っていない」と答えた16%の保護者に、どんな支援ができるかを考えていく必要があるのではないのでしょうか。

新型コロナウイルスの流行が始まった年から、その影響について聞いていますが、「あったと思う、または今もあると思う」が64%で、「なかった」を大きく上回っています。影響の主なものとして、学習意欲の低下、身体の不調、生活リズムの乱れなどがあげられています。子どもが学校を休んでもいいんだと思うようになり、不登校やひきこもりになったという記述もありました。文部科学省の調査では、新型コロナウイルスに起因する不登校の子どもは、全国で9万人を超えています。今後も、新型コロナウイルスの影響を考えていく必要があるようです。こどもサポートに通ってくるわけとして、「ここが落ち着く」という声が多く集まりました。落ち着く理由は、子ども一人ひとり違っていますので、これからもその違いを受けとめていきたいと思えます。

一方で、「特に理由がない」、「不登校でいることにストレスがない」という子どもが増えてきているようです。コロナの影響で、保護者の考えが変わってきていますので、それを反映している可能性もあります。初年度は、研究部員だけで子どもの声を集めましたが、今後はこれを他のスタッフにも広げていくことや、子どもアンケート調査の実施も課題としました。

## 令和5年度の取組

令和5年度は、令和4年度に準じて、次の4つに取り組みました。

### 1 実践事例の収集と検討

日常の中で、子どもから聞こえた声を持ち寄り、どうしてそういうことを口にしたのか、あるいは口にせざるを得なかったのか、どんな思いで言ったのか、また、支援者のどんな関わりがあって、それが生まれたのかなどについて検討する。

### 2 子どもアンケート

令和元年度と2年度に行ったものをベースにしながら、文部科学省の実態把握調査等を参考に、質問用紙を作成し、無理のない範囲で実施する。

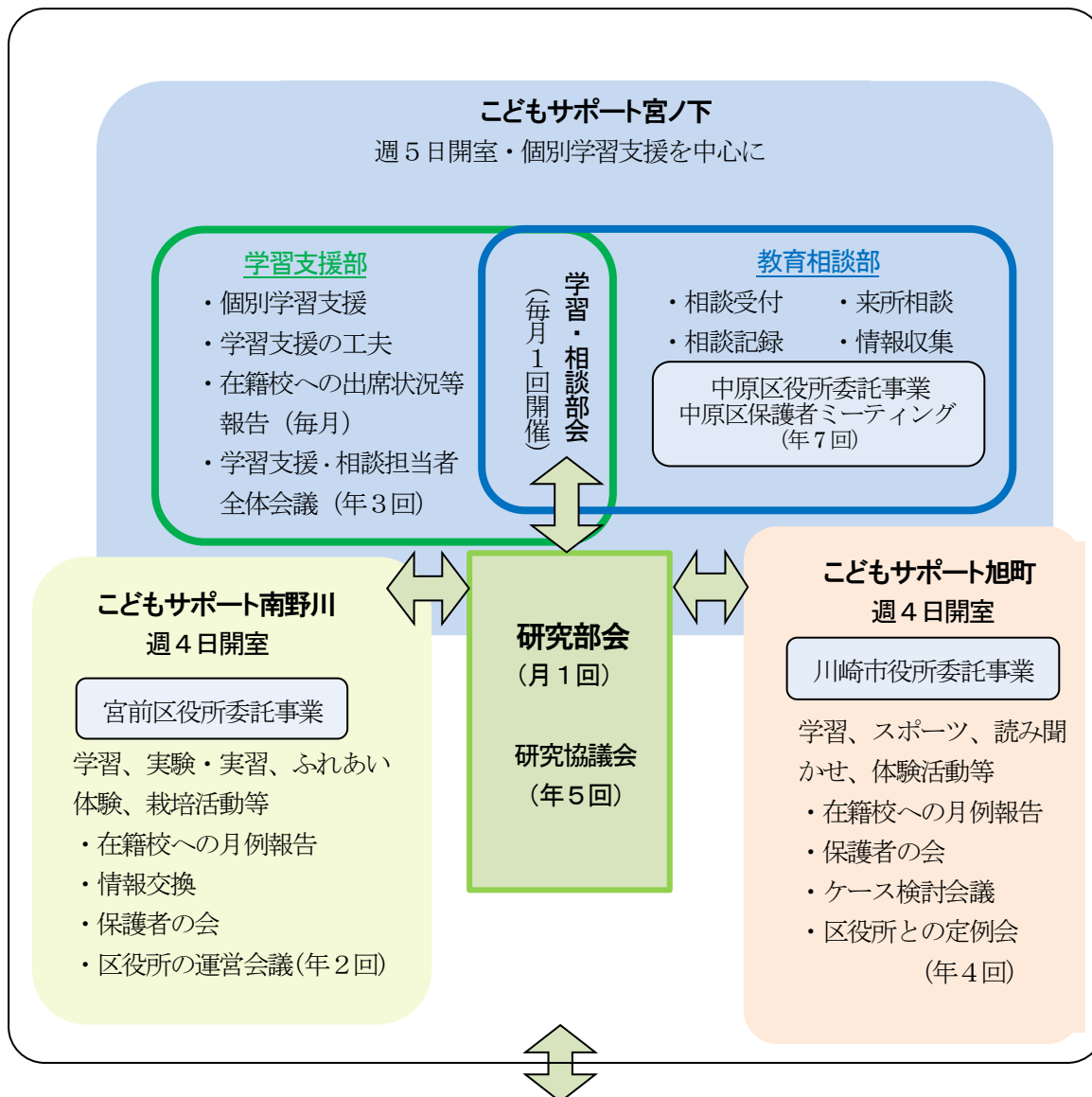
### 3 スタッフアンケート

こどもサポートのスタッフを対象に実施する。質問に対して項目を選ぶ形式ではなく、研究テーマに関わる具体的なやりとりを含むように自由記述とする。子どもの声とスタッフの思いを、いわばミニ事例的に寄せてもらい、実践事例の検討に活かすようにする。

### 4 保護者アンケート

令和元年度と2年度に行ったものをベースにしながら、文部科学省の実態把握調査を参考に実施する。学校に対する考えやコロナの影響などについて伺う。また、こどもサポートに対する要望を伺い、今後に生かすようにする。

## 2 研究体制



### 連携・協働をすすめる機関

- ・学校（通級指導教室等を含む）・各区のS S W ・区の地域みまもり支援センター
- ・総合教育センター（教育相談センター、特別支援教育センター、ゆうゆう広場）
- ・家庭訪問相談員 ・福祉事務所・児童相談所・児童養護施設・発達相談支援センター
- ・民生委員児童委員 ・保護司 ・医療機関 等

\*研究部会：理事長、副理事長、事務局長各1名に3つの「こどもサポート」からの研究部員6名の計9名で構成する。

\*研究協議会：上記研究部会に岡田守弘横浜国立大学名誉教授、常務理事1名が入って、11名で構成する。岡田守弘先生には研究協議会の委員長として、研究全体を統括していただいた。

## Ⅱ 子ども・保護者アンケート

### 1 子どものアンケートから

#### <目的について>

最近、子どもと関わる中で、不登校の様相が変わってきたのではないかと感じさせられることがあります。そして、どの子にもそのような傾向があるのだろうかという疑問をもつことがあります。不登校に対する文部科学省や各教育委員会の捉え方が変わってきたことや、コロナ禍の影響を受け学校や保護者の考え方、感情にも変化が出てきているのでしょうか。それに連動し、子どもの意識も変わってきているのでしょうか。

「不登校の子どもにとって、学校とはどのような所なのだろうか」「家族をどのように思っているのだろうか」「不登校である自分を、どのように受けとめ、感じているのだろうか」など、研究部員が知りたいことについて話し合いました。整理した結果は、「学校」「友だち」「家族」「自分自身」の自分を取りまく概念への4視点と、「サポートセンター」の5つのカテゴリにまとめることができました。これらは、令和2年度に実施した子どもの「不安」に着目した調査項目と重なるものが多く、これら5つのカテゴリによる視点をもってアンケート調査を実施し、まとめれば、子どもの気持ちをより多面的に客観的に捉えられるのではないかと考えました。

#### <実施に向けて配慮したこと>

不登校である子ども本人に対するアンケートには、言葉による表現認識の深浅などに難しさがあります。子どもが発した言葉に関連した内容を尋ねることは可能かもしれませんが、多くの子にその機会が得られるわけではありません。きき方によっては、誘導的になってしまうかもしれません。デリケートな内容でもありますので、子どもの負担にならないかと心配でもあります。読み書きが難しい子や話さない子もいますので、一人ひとりの特性を理解した上での配慮が必要となります。

一年目は、「子どもの声をきくこと」と「アンケート」との関係、質問の内容、記述式か選択式かについて話し合いを重ねました。二年目は、実践事例と並行して質問項目の検討を進め、次のような配慮のもと、質問用紙を作成し、アンケート調査を実施しました。

- 子どもの負担にならないように、質問数を絞り、無記名で、質問紙によるアンケートにしました。質問数が少ないかわりに、自由記述の欄を設けました。
- 一人ひとりにアンケートの目的や記入の仕方について説明しました。読解が難しい子には、スタッフが読み上げるなど一人ひとりの特性に配慮して実施しました。終了後、子ども自身の手で、回答を集めるBOXに入れるようにしました。

◇調査対象：こどもサポート宮ノ下・南野川・旭町に登録している小学生・中学生・高校生年代の登録者のうち90名に配付（回答76名 84.4%）

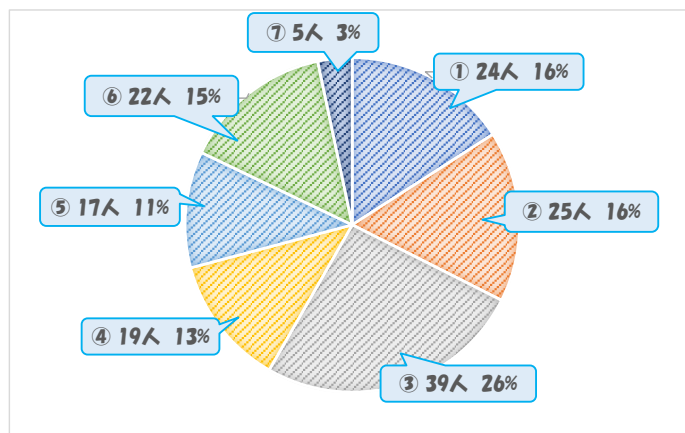
◇調査時期：令和5年7月中旬～9月末



◎あなたの思いに合うものを選んで○をつけてください。いくつつけてもかまいません。

＜学校について＞

	(人)
① 教室がザワザワして落ち着かない	24
② クラスの人たちが苦手	25
③ 勉強がわからない	39
④ 学校に行く意味がわからない	19
⑤ 合わない先生がいる	17
⑥ その他	22
⑦ 無回答	5



＜あなたの思いをもう少し聞かせてください。＞ (自由記述 一部抜粋)

- ・自習をしている時、周りが少しうるさい。
- ・学年の子達と合わない。
- ・友達ともめたり先生が苦手だったり、給食にトラウマがあり、給食の時や外食の時、すぐにおなかが痛くなる。
- ・クラスや部活の子たちと合わせるのが苦手で、無理してまで学校に行く理由がわからなくなった。
- ・友達ができない。教室で一人。
- ・勉強方法がわからない。
- ・クラスで椅子に座っていると、わからないと動きたくなる。
- ・テストでよい点数を取れるようになりたい。
- ・家でも勉強はできるのに、わざわざ学校に行く意味が分からない。
- ・学校は、小学校では個別級だったから少し慣れないこともあるけど、クラスでは友達がいるから学校は嫌いではない。先生一人と生徒が何人もいると、授業でも先生が何を言っているか分からないし、グループになっての話し合いとかすごく苦手。塾とかだと先生一人と生徒一人で向き合っていてやりたい勉強もできるし、分かりやすく説明してくれる場だから、学校は嫌いではないけど行く意味が分からなくなる。
- ・学校に行ける感じになったけど、まだ最初の方には戻らない。元々、学校より家が好きて、学校はそんなことから友人関係とはべつに学校に行きたくない気持ちはずっとある。
- ・学校だと、先生一人に生徒複数人だと、自分は先生が何を言っているか分からないから、学校より塾とかの方が自分に合う勉強とか自分がしたい勉強ができるから、学校に行く意味がわからなくなってきた。
- ・主な不安は、合わない先生がいること。
- ・いちいちうるさい先生がいる。
- ・友だちがいて楽しい学校で悲しいことはない。勉強は少し面倒だけど、一生懸命取り組んでいる。
- ・朝の機嫌が上がらない。
- ・集中力が続かない。
- ・被害妄想がすごく、ちょっとしたことで深く考えてしまう。
- ・寝起きが悪くて学校に行くのが苦。
- ・学校に行きたい気持ちはあるけど、でも今はフリースクールがとても楽しいので、いいかなと思ったりしている。
- ・最近では忙しくて心の整理ができていないけど、一段落ついて自分を見つめ直して、いつかはクラスに行きたい。
- ・本当は教室に入るのが嫌だけど、授業態度も成績に入るので頑張っている。

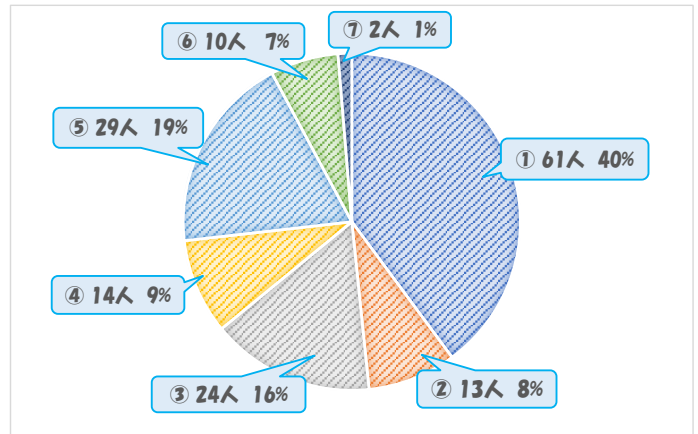
＜聞こえてきたこと＞

令和2年度のアンケートでは、「クラスの雰囲気合わない」という回答が32%程度で、今年度も「教室がザワザワして落ち着かない(16%)」「クラスの人たちが苦手(16%)」を合わせると32%と、ほぼ同数の結果だった。

「勉強がわからない」と回答したのは、2年度が40%、今年度は26%だった。一見減少したようではあるが、今年度の＜自分自身について＞の中で「勉強が分かるようになりたい」と、30%の子が回答していることから、やはり、「わかるようになりたい」という思いを多数の子がもっていることが分かる。しかし、④「学校に行く意味がわからない(13%)」や自由記述の中の「1対複数の学習では、先生の言っていることがわからない」といったコメントから、その思いに近づくための場として「学校」が必要とは思わない子もいることが捉えられる。

### <友だちについて>

	(人)
① 友だちがいる	61
② 友だちがほしい	13
③ まわりの子に合わせるのがむずかしい	24
④ 悪口を言われたりいじめられたりしたことがある	14
⑤ まわりの子から何か言われそうで不安	29
⑥ その他	10
⑦ 無回答	2



### <あなたの思いをもうすこし聞かせてください。>

(自由記述 一部抜粋)

- ・前はいた。
- ・知っている子はいるけど、名前を覚えていない子もいる。
- ・友だちがいると塾でも学校でもそうだけど、友だちがいることで学校にも少し行けることもあるし、自分はすごく嬉しい。
- ・友だちはたくさんいるから平気。
- ・友だちがいる。いろいろな人としゃべれているから楽しい。
- ・友だちがいるから学校が楽しい。
- ・友だちは10人いるから、もうこれ以上はいらない。
- ・南野川で友だちと楽しく勉強できているし、一緒に遊んでいる。学校では友だちがいるから、学校にも少し行けている。
- ・仲の良い友だちはいるが、その分、友だちは少なく会話ができない。
- ・ゲームなど趣味の合う友だちが最近いない。自分の好きなゲームの話ができる友だちがほしい。
- ・あんまり学校に行ってなかったから、周りのみんなが何を話しているかわからなくて合わせられない。
- ・いじめられたり・・・ではないんですが、いじりみたいなのをされた。
- ・自分だけいないグループを作られた。
- ・1回かけぐちのようなのが聞こえてきたが、はっきりしてないのが怖い。
- ・悪口を言われたりしたことがあるからこそ、気にしすぎちゃっていろいろ考えてしまう。
- ・小学校の頃に、外見でいじられてから、また何か言われるようで怖い。
- ・本当は違っても、何か言われそうで嫌だ。
- ・周りの視線が怖い。
- ・話をするときにも、嫌なことをさせていないか、迷惑をかけていないかが不安になる。
- ・別にいなくて困ったようなことはないから、いなくて良くなって。
- ・コロナで友だちと遊べない。

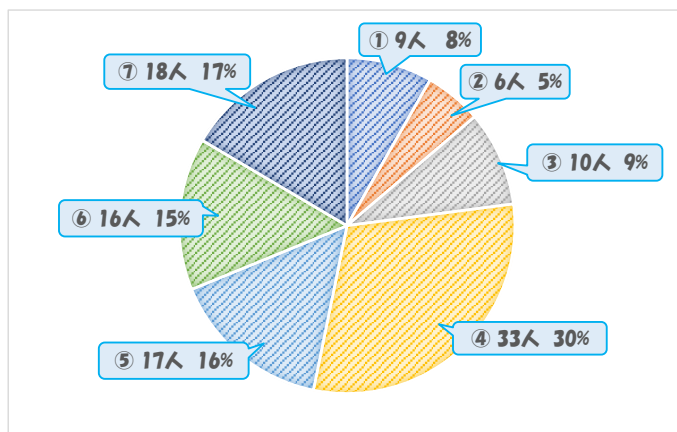
### <聞こえてきたこと>

令和2年度では「親しい友だちをつくりたい」と回答した子が27%程度だったのに対し、今年度は「友だちがほしい」と回答した子は8%と低かった。それに対し「友だちがいる」という回答は40%と、かなり高い結果だった。自由記述でも、友だちがいることをうかがえる文章が目にとまるが、「友だち」に対する解釈について気になった。直接的な関わりは無く、ネットやオンラインゲームのみでつながっている相手も「友だち」として捉えているように思える。何らかのつながりがある相手は「友だち」という広い解釈での回答も含まれているのではないかと。自由記述からは「ひとりぼっちではない」「孤立していない」という意識もうかがえる。また一方で、③「まわりの子に合わせるのがむずかしい」や⑤「まわりの子から何か言われそうで不安」と回答する子が多いのも見逃せない。



### <家族について>

	(人)
① 自分のことをわかってほしい	9
② きょうだいで比べないでほしい	6
③ 親の考えを押しつけないでほしい	10
④ 心配をかけているので申し訳ない	33
⑤ あまりうるさく言わないでほしい	17
⑥ その他	16
⑦ 無回答	18



### <あなたの思いをもう少し聞かせてください。> (自由記述 一部抜粋)

- ・何度言われても、自分を変えたり生まれ直すこともできないので、申し訳ないけど理解してほしい。
- ・自分の話も聞いてほしい。
- ・説教が長くて眠くなる。
- ・親が、全日制の高校に行くと思っている。
- ・祖父がうるさいのが嫌だ。
- ・親に自分の意見を全部言いたいけど、なかなか言えない。(言えている部分もある)
- ・基本的に仲良しですが、自分の思っていることを言えないことがある。
- ・なんか親も悩んでそうで、負担が大きくなってそう。
- ・心配をかけて申し訳なかったが、サポートに行くようになって大丈夫になった。
- ・中学生になってから親のいうことが少し理解できるようになり、心配かけて申し訳ないと思う。
- ・家族は大切にしている。お手伝いや、食べ物を作ってくれたことに感謝している。
- ・いつも行く場所を探してくれてうれしい。
- ・ゲームをやめるように言われた。
- ・中学生だから自分の力で何でもやりたい。
- ・勉強とかは姉が教えてくれて、すごく感謝している。
- ・話なども聞いてくれるし寄り添ってくれるので、特にない。
- ・自分の祖母と祖父の体調が最近悪くなってきて、母がいないと学校に行けない。元々、そんなに学校に行っていない。本当にたまにしか学校に行けなくなったりしている。

### <聞こえてきたこと>

今年度の選択肢6つのうちの4つが、令和2年度のものと同重なっているが、集計結果には大きな違いが見られた。

- |                    |       |       |   |     |     |
|--------------------|-------|-------|---|-----|-----|
| ・「あまりうるさく言わないでほしい」 | 令和2年度 | 35.1% | ⇔ | 今年度 | 16% |
| ・「自分のことをわかってほしい」   |       | 24.6% | ⇔ |     | 8%  |
| ・「きょうだいで比べないでほしい」  |       | 22.8% | ⇔ |     | 5%  |
| ・「親の思いを押しつけないでほしい」 |       | 21.1% | ⇔ |     | 9%  |

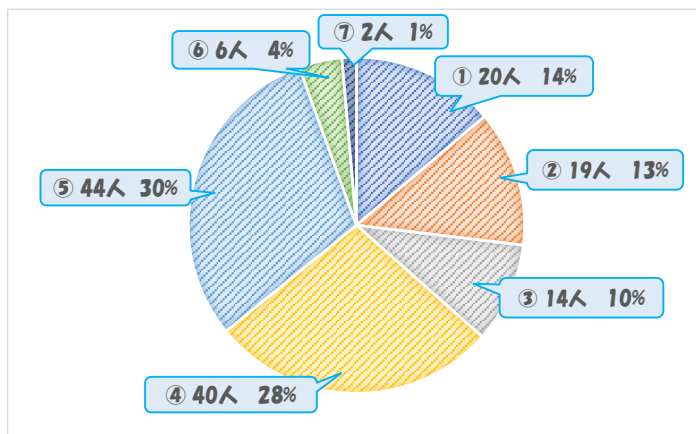
どれも半数以下に減少しており、「きょうだいで比べないでほしい」においては4分の1以下だった。

「不登校」という状況に対する保護者の受け止め方に変化があるのだろうか。それにより子どもへの対応に変化が起こり、この結果につながっているのではないだろうか。

子どもたちの30%は、自分が不登校状態になっていることを「申し訳ない」と思っていることがわかる。また、無回答が多いことも顕著な結果である。「学校」「友だち」「自分自身」の質問に比べ、「家族」に関しては無回答が17%という高い結果だった。子ども達の思いに合う選択肢がなかったからなのか、家族のことに触れたくないという思いがあるからなのか、もしくは保護者の不登校に対する受け止め方の変化から、不満が減少したからなのかは明らかではない。

### <自分自身について>

	(人)
① 今のままの自分でよいと思う	20
② 自分を変えたい	19
③ 誰かともっと話したい	14
④ 自分に自信がない	40
⑤ 勉強が分かるようになりたい	44
⑥ その他	6
⑦ 無回答	2



### <あなたの思いをもう少し聞かせてください>

(自由記述 一部抜粋)

- ・今のままでいいかなと思ったりもするし、高校生からは普通に……。少しは、自信をつけたり自分を変えたいなと思う。
- ・先のことも考えられない。変わらない自分が嫌い。
- ・コミュ障を治したい。
- ・すぐに親に頼るところ。もっと自分でどうにかしたい。
- ・気軽に話ができたらいいな。
- ・イライラしすぎないようにしたい。
- ・言葉に気をつける。行動する前によく考える。
- ・元通りになりたい。
- ・もっと10人の友だちと遊びたい。野球やゲームがうまくなりたい。
- ・自分は小学校の4年の算数ができるかどうかあやしい感じだし、何かを説明したり文章を書くことがすごく苦手で、だから勉強をわかるようになりたい。あとは、自分に自信が無いときに結構あって、例えば誰かに数学を教えてもらう時に、問題を自分一人で解いた後、その誰かに「合っている」と言われないと次の問題に取り組めないことがある。その他にも自分にすごく自信がない。
- ・昔より変わったと思うが、自信がないのは変わっていない。
- ・勉強をして良い成績を取りたい。良い点数も取りたい。
- ・国語も分かるようになりたい。
- ・将来のためにも勉強ができるようになりたい。
- ・もっと勉強ができるようになりたい。
- ・私は、小学校の3・4年の算数もあまり分からないけど、勉強をがんばるようにしたい。
- ・将来を考えると、勉強ができないと生きていけないと思う。
- ・自分自身については自分が一番よく分かっていないので、何も言えない。
- ・自分を変えるのはめんどくさい。

### <聞こえてきたこと>

令和2年度「自分に自信がもてない(49%)」、今年度「自分に自信がない(28%)」という選択肢から、自分に自信がないと感じている子が減少していることがうかがえる。また、令和2年度「このままの自分でいいかな(37%)」という結果からは、自分自身の有り様に迷っている様子がうかがえる。今年度は「今のままの自分でよいと思う」という選択肢だったが、集計結果は14%だった。これは、今の自分を肯定的に捉えられている子どもと言えるのだろうか。現在がどのような状況であれ、「今の自分」を肯定的に見られることはとても大切なことである。その裏付けと一概には言えないかもしれないが、<家族について>の項目の中で、「不登校」に対する保護者の受け止めの変化が感じとれたことも、この結果につながっているのではないだろうか。自由記述からは、自分を変えたいと考えている声がかきこえてくる。

<子どもサポートについて、良さや要望、困っていることなど何でも聞かせてください。>

(自由記述 一部抜粋)

- 今の子どもサポートで満足している。
- 静かで勉強がしやすい。
- 学校と違って静かな場所で集中できる所なので、勉強が進む。
- ちょっと家から遠いのが困っている。
- 勉強ができそうで良い。
- 勉強を教えてくれること。
- 分からないところを聞ける。
- 分からないところを丁寧に教えてくれる。先生方がものすごく元気。
- 勉強しやすい。
- わかりやすい。
- もう少しプリントを多くしてほしい。
- 教えてもらっていることが覚えやすい。
- 1対1だから、よく教えてくれてわかりやすい。
- 学校と違って、そんなに朝早く起きずに行かなくていいし、やっぱり自分のやりたい勉強を分かるまで教えてくれたり、学校の出席も取れて、自分的にはすごくうれしくて、とても良いところだなと思う。
- 1時間だからいい。
- 自分のペースで勉強ができる。
- 先生と話せる。
- 楽しく通わせてもらっている。
- サポートセンターは、自分が勉強したいときに勉強できたり、友だちと一緒に遊べたり、いつも楽しい。いつも感謝している。
- 同じような気持ちの方が多いので、共感しやすい人と仲良くできる人が多い！居場所がなかったときに支えられた!!
- 学校や学年の違う子とも話ができて楽しい。
- 話しかけてくれたり、話を聞いてくれたり、居心地が良い。静かで自分のペースで通える。
- 特に今のところはない。先生方は優しいし勉強もわかりやすい。友だちもいるし最高。
- 顔が、考えが、明るくなった。話を聞いてくれる。
- 担任のこと、友だちのことで、ただでさえ悩んでいるのに、毎回余計なことをしてさらに悩んでしまう。信頼できる他校の友だちには言った。が、いまだに自分が怖い。
- ずっと外に出られなかったときは、本当に終わりだと思っていた。その時は学校か家しかないと思っていたけど、サポートがあるって分かって行ってみようと思った。来てみたら同年代の子と話ができて視野が広がった。自分のまわりにも不登校の子がいるので、その子たちに「こういう場所(サポート)があるんだよ」ということを伝えてもいいのだろうか。もしよければ、不登校で悩んでいる子たちに「家→学校という選択肢の中に、家→サポート→学校(最終的に)という選択肢もあるんだよ」ということを伝えたい。

#### <聞こえてきたこと>

子どもたちは、誰もが緊張した様子で通所を開始する。そして何回か通う間に、少しずつ少しずつほぐれていく。時間がかかっても、緊張感がほぐれていったことで自分の思いを自由に表現できたのだろう。

自由記述の中には、「静かで勉強がしやすい」というように、「勉強」に関することが多い。「丁寧に・・・」「わかりやすく・・・」「1対1で・・・」といった言葉から、スタッフの子どもに寄り添う関わりが大切だと再確認した。

また、居場所としての要素も大きいですが、「居られる『場』」というだけでなく、子どもにとっては「話しかけてくれたり、自分の話を聞いてくれたりする人がそこに居る」といった「精神的な居場所」となっていることも捉えられる。これは、子どもたちの支援者であるスタッフとしては、何よりも大事にしていきたいことである。

## 2 保護者のアンケートから

昨年度に  
引き続いて

保護者へのアンケートは、こどもサポートをさらに改善するために、毎年行っています。こどもサポートへの要望や意見などを伺うとともに、研究に関わる質問を加えてご協力をいただいています。研究2年目となる今年度も、昨年度に引き続き、保護者が不登校要因として考えていることは何か、不登校をどのように考えているのか、どんなことを願っているのかを文部科学省の実態把握調査の項目を参考に聞くこととしました。また、新型コロナウイルスの影響についても継続して聞いています。

昨年度の  
ふりかえりを  
生かして

昨年度は、研究1年目ですので、「アンケート調査をするかどうか」からスタートしました。検討を重ねた結果「保護者アンケートは毎年行っているので実施した方がよい、その際、スマホでも回答できるWeb調査を活用してみよう」ということになり、保護者アンケートを実施することになりました。

12月中旬から下旬までの短い期間で保護者に協力をお願いしましたので、回収率は50%に満たなかったのですが、「スマホで回答できて、今までよりもやりやすかった」という声もありました。

このような点を踏まえ、今年度は、下記の3点を確認した上でお願いすることにしました。「子どもが成長するために大切なことはどんなことか」を書いていただく欄も設けました。



今年度も  
よろしく  
お願いし  
ます。

- 昨年度と同じ項目にする。
- 調査方法は、質問紙とweb調査の併用とする。
- ゆとりをもった調査期間を設定する。

- 1 調査対象 こどもサポートに通所している子どもの保護者89名
- 2 調査方法 質問紙とWeb調査（Googleフォーム）
- 3 調査期間 令和5年7月15日～9月30日
- 4 回収状況 83件（回収率93%）

	小学校				中学校			高校			合計
学年	3	4	5	6	1	2	3	1	2	3	
人数	6	1	6	9	10	18	22	5	4	2	83

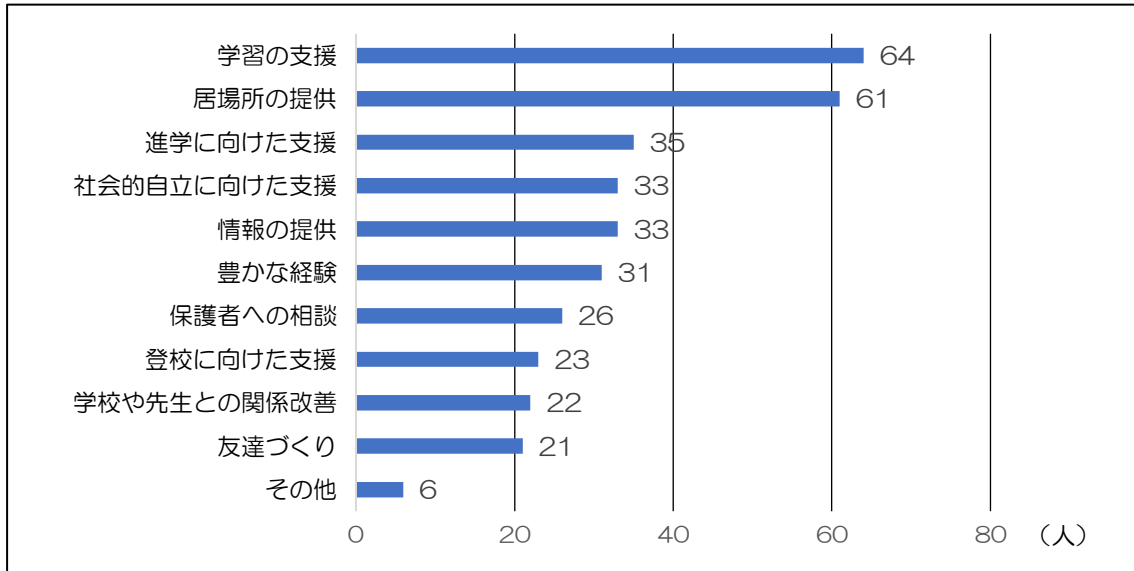
【参考】 昨年度の回収状況：44件（回収率43%）

	小学校				中学校			高校			合計
学年	2	4	5	6	1	2	3	1	2	3	
人数	1	1	4	5	9	14	9	1	0	0	44

昨年度よりも回収状況（回収率）が大幅に増加している。

昨年と同じ質問内容だったことと、2か月半の調査期間を設けたことで、ゆとりをもち安心して回答できたのではないかと考えられる。また、スマホでの回答が大半を占めていることから、Web調査での回答がしやすかったのではないかと考えられる。

1 こどもサポートに期待していることは何ですか？（複数回答）

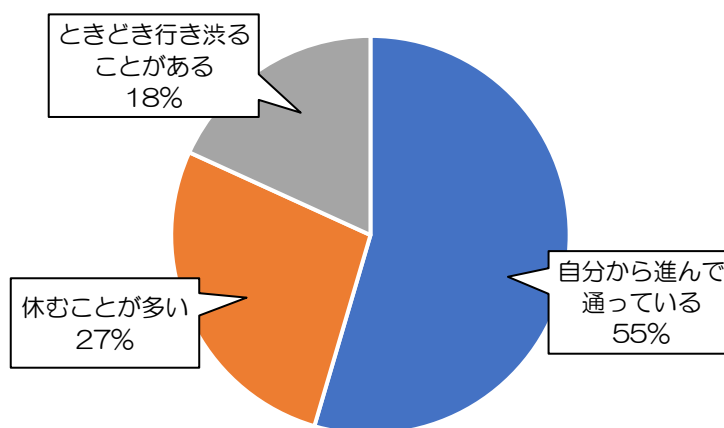


《その他の自由記述》

- 自分に自信を持てる経験
- 様々な子どもへの理解

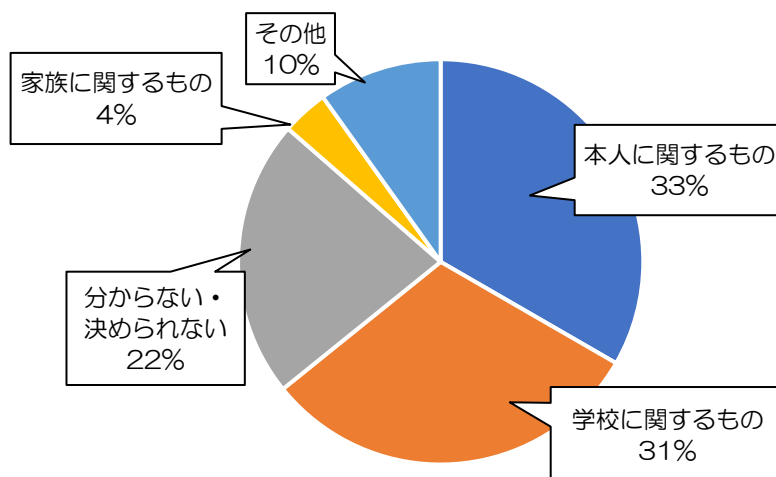
「学習の支援」と「居場所の提供」を最も期待している。また、「進学・社会的自立」等、将来に向けた支援を期待する傾向が見られた。  
 ほぼ昨年度と同様の結果だった。

2 お子さんの通所の様子を教えてください。



昨年度は「自分から進んで通っている」58%、「ときどき行き渋ることがある」23%、「休むことが多い」19%だった。昨年度に比べて「休むことが多い」割合が増えていた。「こどもサポート」に不安があるのか、子どもが自己決定している表れなのか等、考えていきたい。

- 3 文部科学省は不登校要因を A 学校に関するもの（いじめ、友だち関係、先生との関わり、学業不振、進路、部活など）、B 家庭に関するもの（環境の変化、親子の関わり、家庭内不和）、C 本人に関するもの（生活リズムの乱れ、遊び、飛行、無気力、不安）の3つに大別しています。不登校は様々な要因が絡まっていて簡単に決めることはできませんが、お子さんの場合はどのようにお考えでしょうか。最も近いものを選んでください。

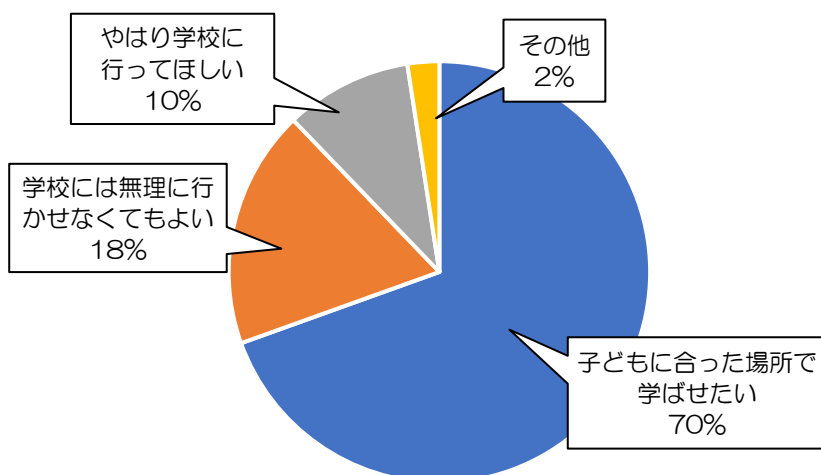


《その他の自由記述》

- 学校も家庭も本人もすべてに関するもの
- 集団生活の強要

昨年度同様「学校に関するもの」「本人に関するもの」が多くを占めていた（昨年度：学校39%、本人25%）。一方「分からない・決められない」の割合が18%から22%に増えていた。  
改めて「不登校のきっかけ」には様々な要因が絡まっていると保護者が感じていることが分かった。

- 4 近年、フリースクールなど学習に関する場所が増えていきます。学校に対する考え方も変わってきています。今のあなたの考えに近いものを選んでください。





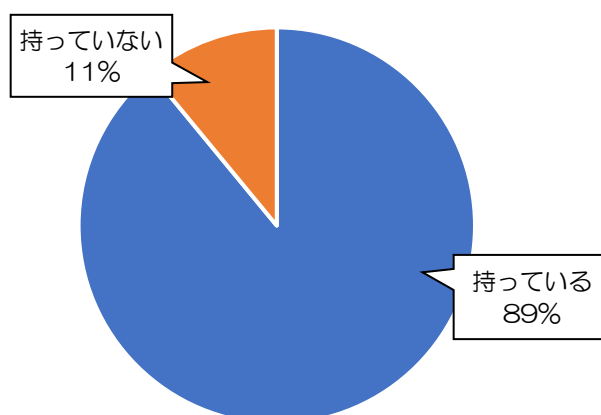
《その他の自由記述》

- 学校には無理に行かなくてもいいが、本人に合った場所で学んでほしい。
- 子どもに合った場所で学ばせたいが、学校でしか得られないものがあり、まだまだそれに応じた社会なので迷います。

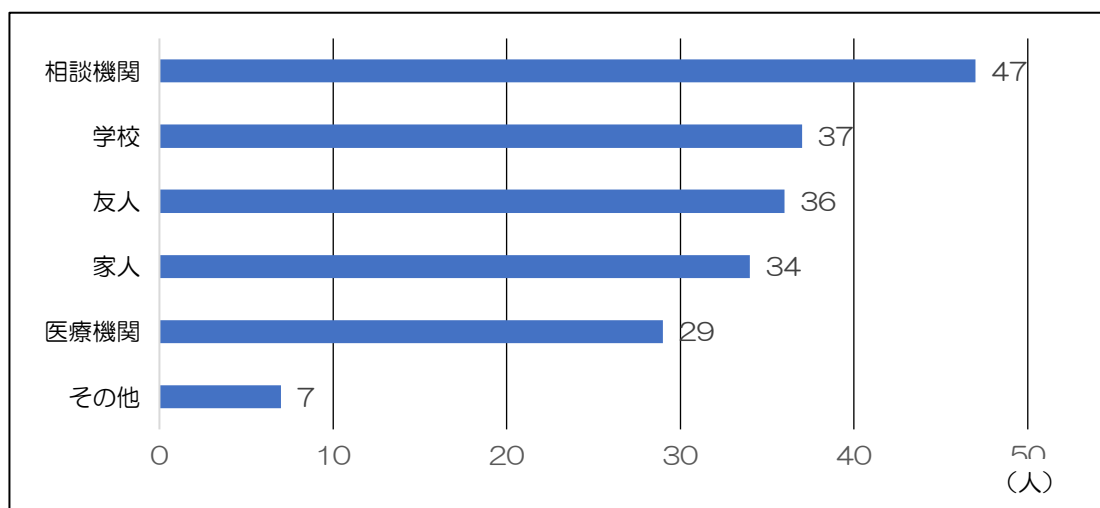
昨年度と比べると、「子どもに合った場所で学ばせたい」が増え（52%→70%）、「やはり学校に行ってほしい」が減って（18%→10%）いた。

「学校でしか得られないものがある」と思いつつ、「学校だけが居場所ではない」と考えている保護者が増えているということなのだろうか。では、「学校には無理に行かせなくてもよい」は昨年度と同じ（18%）なのはなぜか考えていきたい。

- 5 不登校は保護者に大きなストレスをもたらします。あなた自身は相談できる場所や相手を持っていますか。



- 「持っている」の場合、相談の相手や機関を選んでください。（複数回答可）

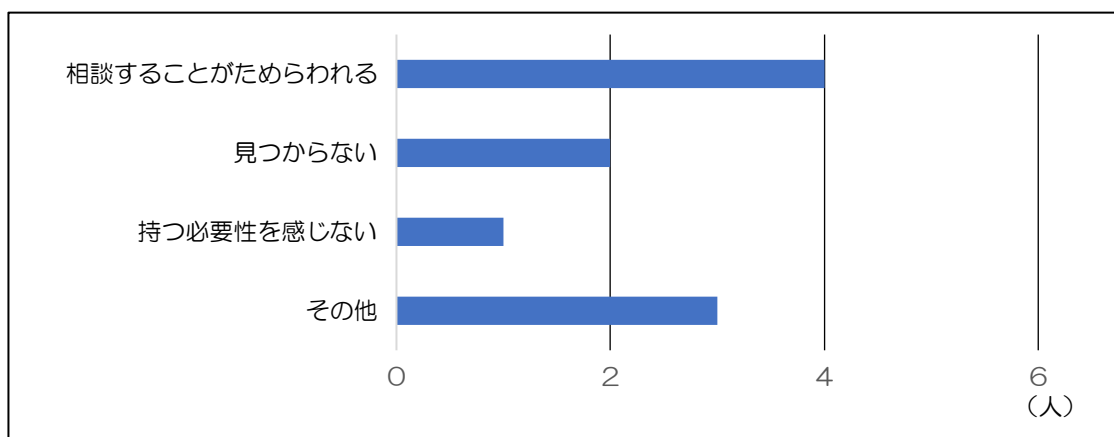


《その他の自由記述》

- フリースクール
- フリースペース



○「持っていない」の理由を選んでください。(9名の回答：複数回答)



《その他の自由記述》

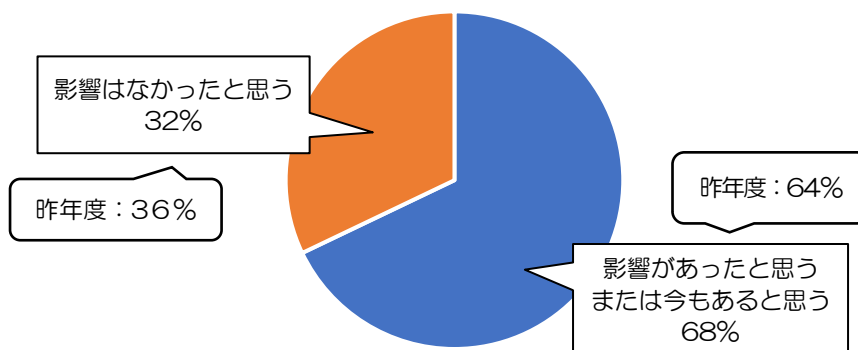
- ・家族以外に話せない。
- ・解決にはつながらない。

昨年度は「持っている」84%、「持っていない」16%だった。この結果から、「持っていない」と答えた16%の保護者にどんな支援が可能かを考えていくことが、課題として挙げられていた。

今年度は「持っていない」が11%に減った。少しでも成果が出たのであれば幸いである。とはいえ、まだ「相談することがためられる」保護者がいることも事実である。

今後も個に即した支援を続けていきたい。

6 新型コロナウイルスは、子どもたちの成長に大きな影響を与えているといわれています。あなたのお子さんについてはいかがですか。影響があった、または今あると回答した場合は、その主なものをお書きください。



不登校の原因になった、コミュニケーション不足になった、外出・交流の機会が減った、意欲が低下した、体力不足になった等、様々な記述があった。また、ポジティブに捉えて、学校に行かなくてもよいことでのびのびと生活できた、ストレスがなくなった、学校を休むことが不自然ではない、学校が絶対に必要ではない、自分を見つけた等の記述もあった。

子どもが成長するために大切なことはどんなことだと思いますか。主なことをお書きください。

保護者の自由記述を「自信」「自己肯定感」「居場所・環境」「人との関わり・経験」の4視点で整理しました。スペースの関係で載せきれなかった記述もあります。

### 自信

- 分からないけど、子どもに合った居場所で、自信を持つようにして欲しい。
- 自分で考え行動する力。人に頼る力。成功体験を持ち自信をつける。
- やらされるのではなく自分から考え行動する力。誰かに相談できる力。
- 自分に自信を持つこと。他人の気持ちを汲み取れること。
- 楽しみを見つけて、やりたいと自分から思えること。自分に自信が持てること。失敗の経験も必要。人に頼ることができる。
- 自分を知り、自分にあった道を自分で決めること。
- 自分を信じること。自分でできないときは他人に助けを求められること。
- 自分で考えて失敗を恐れ過ぎず行動出来る様に成る事かと思います。
- 自信をつけさせること。いろんな人と関わりあい、刺激をもらうこと。

### 自己肯定感

- 豊かな経験 育まれる自己肯定感。 ○肯定感を持つこと。
- 好きなことをのびのびやること。人と比べすぎない。何とかかなと思えるような未来の自分への信頼感。
- 子ども自身が感ずることを尊重し、大人の先入観でがんじがらめにしないこと。
- 自分のありのままを認められている、愛されている、信じられている、頼られていると感じること。
- 自己肯定感と信じられる人に出会える事。 ○自己肯定感、夢、希望、自立心。
- 自己肯定感を大切にす。支援を受ける。大人目線の理想を押し付けない。
- 自己肯定感を持てること。困難を乗り越えたり、かわしたりする力を身につけること。
- ある程度の自己肯定感を持ち、自分と人を比較して悲観的になりすぎないこと。自立心を育てたい。

### 居場所・環境

- 理解者を得る事。楽しさ・嬉しさの経験。 ○豊かな経験と友達との関わり。
- 他者との関わり。家族だからこそ、できること、家族だからこそできないことがある。
- 親や大人の方や同世代の子との関わり信頼関係を築くこと色々な経験をする事が子供の成長に大切だと思います。 ○家族だけじゃなく他人との関わり。 ○様々な経験をする事。色々な人と関わる事。
- それぞれの子供に対応する関わり方。遊びや、他の行事などを通しての他人との関わり方や勉強の必要性。 ○様々な人との交流。 ○理解しあえる友達がいること。自信に繋がる成功体験。
- 人との関わり、成功体験や失敗体験。 ○色々な経験をする事。たくさんの人と関わる事。
- 自分のやりたい事を自由に選び色々な経験をする事だと思います。
- 経験が少ない。色々な経験、体験、特に感動することや達成感は味わって欲しい。

### 人との関わり・経験

- 自発的にやりたいことができる環境があること。 ○精神が安定出来る環境。
- コミュニケーション力、何かあった時に何でも話せる信頼できる相談場所、ゆとりがある家庭環境。 ○親子関係。○親や身近な人からの愛情。 ○その子に合った環境と自己肯定感。
- 愛されていると感じること、安全と感じる環境があること、生まれ持った性質が尊重されること。
- ありのままを受け入れてもらえる安心出来る環境の中、自分の力をのびのびと発揮し、自分の力を信じられた時、成長は加速し、自立へと繋がって行くのではないかと思います。 ○思いに寄り添うこと。
- 本人が安心して過ごせる場所を提供すること、そこで落ち着いて過ごす中で、新しいことに向かっていく力を養うこと。 ○サポートする機関や施設が親の身近にあること。 ○自分の居心地の良い環境。
- 個性を自他ともに受け入れ、助け合いながら生きていける環境を作ること。
- 周りの人間との適切な関わりの中で、周りの人と相談しながら自分で行動できるような環境。

### Ⅲ 実践事例

教育活動総合サポートセンターには、こどもサポート宮ノ下、こどもサポート南野川、こどもサポート旭町の3つの子どもたちを支援する施設があります。ここに載せられた実践は、3カ所の「こどもサポート」に通う子どもたちの事例です。

今年度は、「子どもたちの声」から不登校の実情を明らかにするばかりでなく、子どもの成長につながった場面や転換点となったきっかけなどをわかりやすく説明しています。

○事例は、子どもの変化や成長をとらえる共通点で4つに分類し並べました。

- ・自分のペースでできることから自ら動き出した <事例1・2・3>
- ・人との関わりの中によって人の気持ちに気づくようになった <事例4>
- ・自分の思いを表現していくことから自分に自信が持てた <事例5・6>
- ・安心できる場所によってマイナスの自分も出せるようになった <事例7・8・9>

最後に、子どもに関わるスタッフの思いを<事例10「ミニ事例」>として掲載しました。

○題名 この事例を通して何をお伝えしたいのかわかりやすい題名を工夫しています。

○ 初めのグリーンで囲ったところには、サポートセンターのスタッフが出会った時の子どもの姿や子どもの変化(=子どもの成長)が現れた場面などを簡単に記述しています。

○次に、イラスト・吹き出しなどで子どもたちの言葉や対応しているスタッフとのやり取り、スタッフが観察した子どもの様子などが記述されています。ここでは、できるだけ子どもの具体的な姿がイメージできるようにしています。

○ 最後に、ブルーに囲われた部分では、記述された事例を通してスタッフが考える振り返った言葉が掲載されています。子どもたちの声がどのように受け止められ、どのようにして子どもたちの成長につながられていったのか、あるいは、これからの成長につなげていくにはどうすればいいのかというスタッフの振り返りの言葉になっています。

できるだけわかりやすく記述しよう努力していますが、個人が特定されやすいという面もありますので、ここに掲載された事例については他の出版物への転載を控えていただくようお願いいたします。

## 事例 1 興味がひろがり、自ら動き出す（中学2年）

中1で登録した A さんは、小学校の時から別室登校を続けていました。人との関わりが苦手な目を気にしています。自己肯定感の低さを感じますが、「勉強が分かるようになりたい」「友達を作りたい」という強い思いを持っています。興味の広がりが見られるようになってきた頃、自らの動きが見られるようになり、友達に近づいていきました。



どうしてですか？

どうしてですか？

学習中、毎回、「どうしてですか？」と質問が続く。スタッフは A さんの質問を受け止め、A さんのテンポに合わせて学習を進めていった。学習でも生活でもこだわりが強く、一つのことを理解して受け入れるまでに時間を要した。小学校の基本的な内容が未学習で分からないことが多いが、めげずに勉強を続けた。スタッフと一対一でないと学習することは難しいが、中2の後半になると、勉強したことを自分で復習する姿も見られるようになる。頑張ったことを褒められながら、少しずつ分かることの楽しさを感じ始めているようだった。学習中の質問は、分からないからだけでなく、コミュニケーション手段のようにも思えた。これまで、自分の思いを発信しても受け止められた経験が少なかったのだろうか。



～さんと、さっきそこにいた人は、友だちがいないと思う。

A さんは自らの動きが少なく、同じ席に座ったままいることが多かった。「友達をみつけにここに来る子はいるんですか？」と尋ねられたことがある。別の日には、突然、「～さんと、さっきそこにいた人は友だちがいないと思う」と呟いた。自分の周りの子の様子を見つめていたのだろう。友だちを求める気持ちが伝わってきた。

トランプしませんか？



しませんか？



中2の夏、新しく登録した B さんから声をかけられたことをきっかけに、二人が関わるようになる。ソファに並んで座りボソッと話したり、肩を並べて帰ったりする姿が見られた。声の大きさやテンポが似ていて、一緒に過ごしやすい、安心できる相手だったのかもしれない。Bさんと声を合わせて「トランプしませんか」とスタッフを誘いに来たことがあった。それまで未参加だった理科実験にも一緒に参加した。スタッフは、人との関わりが苦手な A さんが、同年齢の子と親しくなる経験ができたことを嬉しく感じながら見守った。

## スタッフを支えに他の子の中へ入っていく（2学期後半～）



むふっ

親しくなった B さんが登校するようになり、また一人で過ごすようになった A さんだったが、興味の広がりが見られるようになった頃、自ら動き出そうとしている場面が捉えられた。

座卓でスタッフが四人の子と話していると、近くに来てスタッフの傍らに座り、話を聞いている。自分から初めて友達  
の輪に入ってきたので驚いた。

楽しい経験になればと、一緒にできそうな遊び（合図で物を取り合う）を提案してみた。遊び方が分かると A さんも参加。その後、他の子が提案した腕相撲に、一瞬躊躇したものの参加。笑い合っ  
て遊びを続けているうちに A さんも「むふっ」と笑い声を漏らした。

スタッフと一人の子が、小学校の教科書の中から好きな話を選び、読み聞かせをし合っている所に A さんが近づいて来て聞いている。

しばらくして、スタッフが「やってみる？」と聞くと頷き、自分で話を選び始めた。読み終わって拍手をもらおうと嬉しそうな表情を見せ、「最後まで読んだの初めて」と満足そうだった。

## 友だちを支えに、自己表現していく

その後の A さんは、年上の C さんと親しくなり、安心して自己表出・自己表現していく。話し声が大きくなり、大声で笑ったり、一緒に歌を口ずさんだり、手を繋いで跳びはねたり、同じテーブルで勉強したりと変化が続く。「顔を見られたくない」と別室で食事していた A さんが、皆と同じ部屋で C さんと一緒に食べられるようになっていった。A さんと同じように初めて食事する部屋に入って来た子に、「弁当デビューだね」と温かな声をかけていた。A さんは C さんと支え合い、他の子と話したり活動したりするようになっていった。

「私は人の気持ち分からない」と話したら、A さんが「私も分からない」と言っていたと話してくれた子がいた。互いに、「自分だけではない」と安心できたのだろうか。

## ふりかえって

勉強が分からず、自分から話をしないことからいじめられた経験がある A さんが、他の子の中で自ら動き始めるには、「受け止められ、勉強に手ごたえを感じ、認められ、自信を取り戻していく過程」が必要でした。自分のペースで過ごしなが  
ら、周囲に目を向け、いろいろな子がいる、自分と同じような子もいると感じられたことが安心につながるのかもしれませんが。それまでの経験をもとに少しずつ挑戦し始めた A さんの成長過程を通して、一人ひとりの子どもが自ら動き出そうとしている瞬間が大切にされ、支えられていくことが必要であることを学ばせてくれました。



## 事例2 「今回のテストは手ごたえがあった」と語り始めた（中学2年）

現在中2のAさん。中1当初は「テスト受たくないなあ、いやだなあ」とつぶやいていた。そのAさんが、中1後期の期末テスト後、来室するや否や「今回は手ごたえがあったよ」と語り始めました。

小5の終わりから通い始めたAさん。表面的には明るく元気に見えるが、繊細な面があり、悩みを抱えた時に来室することが多い。自分で解決したいという思いが強く、考えすぎて一層悩んでしまう傾向がある。「こどもサポート」については、中1の時は「だらだらできるところ」と言っていたが、今は「コミュニケーションがとれるところ」と言っている。保護者は「Aさんが、自分なりのペースで行動するまで待ち、少しずつAさんに任せていこう」という姿勢をもっている。

《小6》



本当は勉強が  
気になっている  
んだよね。

自分はほかの子  
よりできない。

当初は週1・2回の来室だったが、夏休み明けから、来室する日が増えてきていた。学習にはほとんど興味を示していなかった。卒業を控えたある日、「本当は勉強が気になっているんだよね」とつぶやいた。話を聞くと「自分はほかの子よりできない」とも言っていた。「中学校の勉強、少しやってみる？」と投げかけると、うなずいたので、中学入学までの数日間、スタッフと一緒に数学の学習に取り組んだ。

《中1》

【前期中間テスト】



テスト  
受たくないなあ  
いやだなあ・・・

中学校でAさんが最も楽しみにしていたことは部活である。小学校の卒業文集にも「部活を頑張る」と記していた。希望の部活に入部し、部活の日は学校（主に昼前後に登校）、部活のない日は「こどもサポート」という生活が始まった。ただ、悩みはやはり学習のようで、中間テスト前「テスト受

たくないなあ、いやだなあ」とつぶやいていた。話を聞くだけは聞いて「最後はあなたが決めることだね」と伝えた。

テスト後、「数学だけ受けてきた」と教えてくれた。

【夏休み】



宿題と部活  
両方やるのは無理  
どうしよう・・・

夏休みを前に、「宿題と部活、両方やるのは無理、どうしよう」という新たな悩みが生まれた。「部活を休むと9月の新人戦に出られない、でも今の自分では宿題と部活の両立は無理」という悩みである。この件については保護者の悩みでもあり、中学校のSCも相談に乗ってくれた。最終的には「部活は必ず出る、宿題は出来る範囲で」という結論に落ち着いた。

には「部活は必ず出る、宿題は出来る範囲で」という結論に落ち着いた。

Aさんは熱心に部活に参加し、新人戦の選手に選ばれた。「Aさんは自分で決めたことは、いつもしっかりやるからえらいね。新人戦楽しみにしているよ」と声をかけた。

【前期期末テスト】



2教科  
受けたよ！

期末テストは、国語と数学の2教科を受けてきたということだった。「受たくない」という言葉は聞かれず、自分なりに考えてテストに臨んだようだった。後ほどテスト結果も見せてくれた。「国語は、今まで受けたテストで最高点だった」と少し嬉しそうだった。

【後期開始】



「3時間目くらいに登校できないかな」と言われたんだけど。

後期が始まったある日、「顧問の先生に『3時間目くらいに登校できないかな』と言われたんだけど」と心配そうな顔で相談してきた。「きっちり行こうとすると疲れそうだから、行けそうなときに行けばいいんじゃないかな、無理しないように」と答えた。

次に会った時、「どうした?」と聞くと「自分なりに行っている」との返事だった。部活に影響するのかなと思ったので、「早く登校しないと選手になれないとか言われない?」と聞いてみた。「そんなことはない」とのことだった。ついでに「部活前に授業を受けていて辛い?わからないことを質問されたりしないの?」と聞いてみた。すると「教室にいて話を聞いていると『なるほど』と思うこともあるし、先生たちもぼくのことをわかってくれているみたいだよ」と答えが返ってきた。何となくホッとした瞬間でもあった。

【後期中間テスト】



全教科受けてきた!

毎日登校し、5教科全部受けてきたとのこと。どこか誇らしげに見えた。テスト時は登校するもののクラスに入れず、別室で受ける子もいる。ところが、Aさんは別室はいやなようで、しっかりとクラスに入って受けている。

【後期期末テスト】



今回は手ごたえがあったよ!

来室するとすぐに「今回は手ごたえがあったよ」と自分から語り始めた。中間テストと同様に毎日登校し、9教科全部受けてきたというのである。

「こどもサポート」での学習時間が増えたわけではない。自分なりにテスト準備をして、テストに臨んだ自分に満足していると感じられる語り口であった。

《中2》



今日は卓球をする。

部活のある日は登校。ない日は「こどもサポート」に来室。という基本パターンは変わっていない。通常の登校時刻に登校する日が増え、定期テストも全教科受けているとのことである。とは言え、学習に対する不安が払拭されたわけではない。



すっきりしたよ!

前期期末テスト中、テストを受けた後に来室した。「今日は卓球をする」と言うので、卓球をしながら、「調子はどう」と話しかけた。すると「悪くはないけど、やっぱり勉強のことは心配だし、新人戦の選手になれるかどうかも気になる」と話し出した。「手伝えることがあれば手伝うよ」と言うと、うなずいていた。

卓球後、別のスタッフが「すっきりした?」と声をかけると、「すっきりしたよ」と答えた。Aさんが帰宅した後、「テストは大変みたいだけど、受けているのは立派。卓球をしてリフレッシュできたかな」と、スタッフ同士で話をした。

### ふりかえって

「自分のことは自分で解決したい」というAさんの気持ちを尊重し、保護者・学校・「こどもサポート」のスタッフが、それぞれの立場で関わってきた（応援してきた）事例です。

スタッフから「Aさんはいつも自分で決めようとしているし、決めたことはしっかりやるからすごい」と声をかけてきました。スタッフの共通理解と他の子どもたちとの良好な関係がAさんの成長につながっていると感じられます。子どもの自発的な動きを信じ、子どもが必要としていることを考えながら関わっていく（応援していく）ことが重要です。



### 事例3 一人で通所し、元気に学習するようになった（中学1年）

面接の日、Aさんはサポートセンターの入り口で「職員室みたいで嫌だ」と言って立ち止まってしまいました。何とかだめて中には入れたものの、椅子に座ってからも母の腕にしがみついたままで半身を母の後ろに隠すような状態です。学習スペースの見学をする際にも、Aさんは母の腕にしがみついたままで、半ば、母にぶら下がるかのようでした。

そんなAさんも、今では一人で通所しています。学習中のスタッフとのやりとりが、元気に響いてくるようになってきました。

#### 母と一緒に、学習がスタート！

母が同席するという条件でスタートした学習だった。くっつけられたように並んだ2脚の椅子。母は、少しでも椅子の間を空けて離れようとするものの、Aさんは何とか母の腕にしがみつこうとする。学習スタッフは、親子のそんな様子を気にすることもなく、いつも通り穏やかに学習を進めていた。母親と離れる不安が大きいのか、母の腕につかまろうとする姿が見られ、母とAさんとの無言のせめぎ合いが続いた。

そんな状態は複数回続いたが、それでも回を重ねるうちに、2つの椅子の距離は少しずつ開いていった。そしてついに、Aさんがサポートセンターの入り口で母と別れる日がきた。

#### マンツーマンで再スタート！

学習スタッフとAさんとの1対1の学習が始まった。不安の大きかったAさんだったが、回を重ねるうちに安心して学習に取り組めるようになっていった。そのような変化の裏には、Aさんの様子に左右されず、つねに穏やかに学習を進めるスタッフの安定感があった。

一人で学習に来るようになったある日、「今日のAさんはどんな様子かな」と思いながら、離れた席にいた相談担当の耳に、大きな声が聞こえてきた。その聞き覚えのある声に一瞬耳を疑ったが、それは紛れもなく、学習スタッフとのやりとりの中でAさんが発した声だった。その声はさらに続き、まるで友だちと雑談しているかのようなフランクな言葉も聞こえてきた。Aさんが安心して学習に取り組んでいることが伝わってきた。初回からのAさんの変化に、まずは、ホッとすることができた瞬間だった。

えっ！  
今の声は・・・



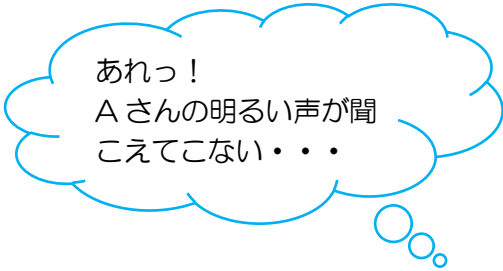
(相談担当)

## Aさんが来ない！

その後の A さんは、時間通りにきて学習を進めていた。学習スタッフとのやりとりも軽快になり、時折明るい大きな声が聞こえてきていた。その声は A さんの安心感のパロメーターに思えた。

そんな状態が数ヶ月続き、年度が替わって学習日を変更することになった。それは、学習スタッフの都合でもあったが、A さんもその変更を快く受け入れた。これまで予定が入っていなかった曜日への変更だったので、家でゴロゴロと過ごしがちだったからだそう。

ところが、その後の数回はきちんと通所していたものの、しばらくすると、その曜日に A さんの姿を見ることはなくなってしまった。体調がすぐれないなどの理由もあったが、それだけではないと感じていた。始めのうちは頑張って通所していたものの、どうやら A さんにとって「〇曜日は休養日」というイメージだったということが、母に連絡をした際にわかった。これまで、〇曜日だけは自分の好きなことをすると決めて過ごしてきたらしい。そこで、学習担当とその情報を共有し、しばらく見守った。それでも A さんの姿は見られなかったため、学習スタッフから改めて曜日変更の提案がなされた。すると、A さんはまた学習に来るようになった。そして、当然のように学習中の A さんの明るい大きな声も復活した。



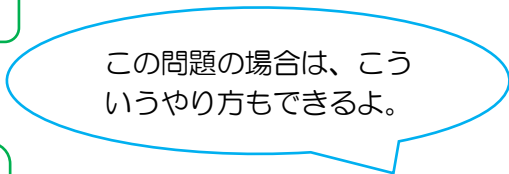
あれっ！  
A さんの明るい声が聞こえてこない・・・

(相談担当)

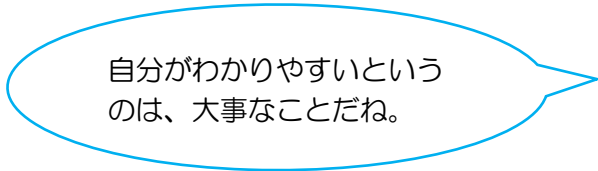


先生、このやり方で解いてみた。

でも、自分はこのやり方の方がわかりやすいんだよ。



この問題の場合は、こういうやり方もできるよ。



自分がわかりやすいというのは、大事なことだね。



(学習スタッフ)

## ふりかえって

「職員室みたいで嫌だ」と言って尻込みし、母となかなか離れられなかった A さん。そんな A さんの明るい大きな声が聞かれるようになったのは、学習スタッフが A さんの思いを受けとめ、安心感につながる接し方を続けてきたからでしょう。一旦は途切れてしまいそうになった学習支援が復活したのも、学習スタッフの寄り添う姿勢があったからだと考えています。支援者としては子どもの思いをどこまで受け止めどこまで寄り添えるか、応援できるかということ、常に問われていると気づかされた思いがしました。

## 事例 4 「僕の話どう思う？」と聞いてきた（中学2年）

面談の時、母がAさんの様子を話そうとすると、Aさんは、考えながら「学校には、ときどき登校しています」「学校に行く理由が分からない」「友だちもいます」と話し始めました。なぜ、Aさんは、ここに来たのだろうかと思いました。Aさんが言うには、「なんとなく教室に入るのが億劫です・・・」「学校は、楽しくないです」それが理由のようでした。

ある日、「ここに（サポートセンター）来るのが楽しいです」と笑顔で話してくれました。いつも喋りだすと一方的だった話し方に変化がでてきました。そして、学校に行くことが増え、笑顔も増してきました。

中1の夏休み後、母と一緒に面談に訪れた。質問をするとちょっと天井を見上げてから、ゆっくり喋りだす態度だった。言葉遣いは、とても丁寧であった。母は、じっと傍で聞いていた。

Aさんは、ここに通うことや教えて欲しい教科を自分で決めていた。

ここに通うのは、週1回でいい。  
だって、僕は不登校じゃないから。  
学校に行こうと思えば行けるよ。



学校には、時々しか行かないです。学習が分からないときや、欠席することもあるかもしれないので、ここに通います。

笑顔で、自分の考えを話してくれた。人なつこさもあり、なんで学校に行かないんだろうと不思議であった。母は、学校に毎日行って欲しいと思っていた。どんな会話のときでもAさんの気持ちを優先し、子どもを信じている母の姿があった。

ある時、



僕には、兄がいます。兄は、何でもよくできます。  
僕は、兄に比べて何にもできません。兄は、努力家で、いくら頑張っても兄には追い付きません。

兄の話になると、兄のことを尊敬しているように感じる一方、表情が寂しそうであった。「そんなに気にしなくてもいいんじゃないの」「Aさんは、自分の特技を磨いていけばいいと思うけど・・・」と助言をしたが、納得していない様子だった。家族の中で、自分のことを褒めたり励ましたりしてくれるけど、兄と自分とを比べられるのが辛そうであった。

学校での様子を聞くと、友達との人間関係について話をしてくれた。



友達はあるけど、僕の話をしつくり聞いてくれる人がいないです・・・  
僕が話をしだすと、最後まで話を聞かないで、どこかへ行ってしまいます。どうしてかなあ・・・

Aさんの話し方には、特徴があった。どんな話題でもまずは、自分の考えを話すことであった。相手はその話に興味を示さないと、相手に興味を持ってもらいたいがために、さらに詳しく丁寧に自分の思いを喋るのであった。大人であれば、時々相槌をうちながら、笑顔で受け入れることができるが、同学年の子どもたちにとっては、必要としない話や同じことを詳しく話されても興味が無い話だと飽きてしまい、傍から離れていくようであった。気がつくといひとりになっていたことがあったそうだ。そんな友達の態度が、Aさんにとっては悩みのようであった。話好きなAさんにとっては、学校に行ってもつまらないと思うようになってきていた。

Aさんと話をする時には、スタッフはAさんの話の内容を整理しながら聞き、話の内容によっては、話を中断して『何を相手に伝えたいのか』、『話し方・聞き方』を大事にした。Aさんの使う言葉を繰り返しながら、話の内容を短くしたり、話の内容の必要感を意識したりして、話をする機会を多くしてきた。また、相手を意識して、相手が何を聞きたいのかを気付いてもらえる話題提供も工夫し、少しずつ、何回も体験を積むようになってきた。

話す側と聞く側の気持ちの違いを少しずつ体験していくことで、Aさんの話し方に変化がでてきた。一方的であった話し方がときには、「僕の話どう思う？」と感想や意見を求めてきた。その時にスタッフは、相手を意識した話し方をするように伝えた。そして、話が分かりやすい時には、すかさず「この話し方凄く分かりやすかったよ」とか、スタッフからも「私の話し方は、どうだった？」などの会話もしてきた。

学習をしている時に、



ここに来るのが楽しいです。  
今度、先生と僕の得意なトランプゲームを一緒にやりたいです。やりかたは、僕が教えます。

Aさんは、学習終了後、鞆に学習道具をしまいながら、笑顔で話しかけてきた。学習が終わっても席から立とうとはせず、この場所にまだ居たいような雰囲気であった。

始めに比べて、学習中での喋りは少なくなり、集中して学習に取り組んでいた。学力テストでは、思ったより点数を取ることはできなかった。スタッフに点数を伝え、なぜ点数が取れなかったのか、テスト問題を自分なりに分析して丁寧に話してくれた。本人の気持ちを大事にしながら最後までじっくり聞いた。スタッフがAさんの話を笑顔で頷きながら聞いているとAさんは、穏やかな表情をしていた。

#### ふりかえって

学校に行っても行かなくてもいいと思っていたAさんが、学校に行き始めました。「学校に行ったら」と声をかけられたわけではありません。喋りの好きなAさんがなぜ友達は自分から去っていくのか、『話す・聞く』の体験を通して、自分と向き合い自分の話し方を見直したからでした。そこに行きつくまでには、本人を取り巻く、家族やスタッフの影響が多々ありました。余計なことは一言も言わず笑顔で子どもの話を受け入れている母の姿もありました。友達にも話を聞いてもらえるようになって、友だちの話にも耳を傾ける余裕ができました。Aさんが自分自身の特徴に気付き、自分自身を変化させていく順応性を今後も後押しをしていきたいと考えています。



## 事例5 自分の思いを少しずつ口にするようになってきた（小学校高学年）

母と一緒に面談にきた A さん。面談中、母の影に隠れるように座った A さんの声を聞くことはなく、今にも泣き出しそうな表情をしていました。その後、学習が始まってからもつぶやくような言葉でさえ、自分から発することはありません。ただ、学習スタッフの問いかけには、小声で短く答えることはできました。

そんな A さんが、徐々に自分のことを自分の言葉で発するようになっていきました。相変わらず、自分から質問をしてくることはありませんが、学習スタッフとのやりとりの中で、自分自身に対する見方が変化していることが伝わってきました。

学習がスタートし、真面目な A さんは毎週きちんと約束の時間に通所してきた。その中でスタッフが心がけたのは、A さんが声を発する機会をできるだけつくることだ。学習の様々な場面で感想や意見を求めるようにしたり、雑談の中で双方向のやりとりを意識したりした。また、主に国語に取り組んでいたので詩の音読を取り入れた。そうするうちに、A さんが自分のことを少しずつ言葉にするようになった。

### <A さんとのやりとりから>

自分はあまりしゃべらない。人に何か相談して「そんなの当たり前」と言われるのが嫌だから。そういう反応が考えられる時は言わない。

（気持ちが沈んでいる時、まわりの人から声をかけられて気持ちが晴れることあるよねと伝えると、）

一人の方が良い。来られると逆に「来ないで～」となる。一人で音楽を聴いて消化する。

心の中には「くやしいこと」が多い。くやしいことは嫌なこと。それで方向性を変えてこうなっているから、嫌なことが多いんだと思う。（「それによって鍛えられたね」と伝えると、）メンタル強くなった。



・・・むしろ、「見ないで」という感じ。友達と盛り上がりたりするのは、見ている方が良い。1 人の方が落ち着くと分かったのは、学校に行かなくなって少ししてから。

自分は人混みが苦手。だから、学校が無理。

週 1 回の 60 分間の中で学習に関することや日常生活のこと等々、会話の内容としては、できるだけ幅広い話題に触れるようにしていった。中でも、A さんは音読した詩の感想を伝え合うことを楽しむようになっていき、その感想交流を通して A さんの思いを受け止めてきた。

A さんがこだわって学習しているものに新出漢字の練習がある。学習を始めたばかりの頃は、不安の表れのように、書き方が薄かったり文字が小さかったりしていたが、回を重ねる毎に文字も大きくなり、濃くしっかりと書くように変わっていった。始めから変わらなかったのは、納得がいくまで書いては消し、消しては書くことだった。ある時は、スタッフのほうが、細かい助言をしすぎたかなと反省したほどだった。



学校に居たときも  
そうだった。先生  
もあきれていた。  
周りが先に終わっ  
てしまっても、別  
に焦らなかった。

(久しぶりに漢字を何度も書き直して いたので、  
完璧主義の話をするので…)

そうではない。最近では面倒く  
さいと思うようになった。前  
は完璧主義だったけど…

Aさんの言葉が変わった。「完璧主義だった  
自分がそうではない自分になった」と言った。  
この変化の裏に何かがあるのか、何がAさんを変  
えたのかは、わからない。

完璧主義はまわりを  
傷つけると、最近思  
うようになった。



(節分の日に「心の中の鬼退治」をした際に)

退治したいのは、「思うだけで行動に  
移せない自分」こういう人になりたい  
のに、思うだけでなれていないから。  
なりたい人は、人とコミュニケーション  
できて、人と話ができる人。

(表情が沈んでいたので声をかけると…)

時々、涙が流れることがある。何だ  
か悲しくなる。今、自分には友達が  
いない。一人で調べて、一人で考え  
て、理解して…

人と話していると、何を言っている  
のかなと分からないことがある。そ  
れは自分の知識が少ないからわから  
ないのかなと思う。知識というのは  
勉強ではなくて、いろいろな人の話  
を聞いて学ぶこと。



(さみしい時に、話を聞いてくれる人がいると  
思うだけでほっとすると伝えると…)

わかります。わたしも話し相手が  
ほしいから。

### ふりかえって

学習当初は、人との関わりを避けるような言葉が多く、自己肯定感の低かった A さん。そんな A さんが少しでも自己肯定感を高め、持っている力を出せるようになるには、学習スタッフとしてどう応援していくことが大切か。それを考えながらの学習支援は現在進行形です。そんな中でも言葉の変化に成長を感じさせられることがあります。これまで A さんが声を出す機会として取り組んできた詩の音読も、A さんの心に響いた時は、思わぬ声を聞くことができました。そのような時間の積み重ねの中で、A さん自身の何かが変化していきました。

最近の A さんから、これまででは考えられなかった「何とかなる」という言葉さえ聞くことがあります。A さんが自分から一歩でも半歩でも前へ歩み出したと感じられ、新たな成長につながると考えています。

## 事例6 「人と話すのは得意です！」(中学2年)

「僕は接客業につきたいです。」

人と関わるのが苦手だと思っていたAさんが、将来やりたい仕事について話した時の言葉です。自他ともに認める人見知りのAさん。学校でもほとんど話さないと聞いているのに、とても意外な言葉でした。

Aさんは、小学校の頃から「こどもサポート」に在所している。人との関わりが苦手で、何度か不登校の時期もあった。「学校に行っても人の目が気になり、教室には入れない。」と言っていたAさんがやりたい職業に「接客業」を選ぶまでに、どんな経験や気持ちの変化があったのか振り返ってみた。

小学生の時

自分の気持ちを言葉にすることが苦手だったが、こどもサポートの担当スタッフとは、よくおしゃべりをしていた。

YouTubeをやっています。顔は絶対出さない。学校の人には知られたくない。もし知られたら大変です。



飼っているハムスターの誕生日に野菜ケーキを作った。それを動画であげたら、今までで一番「いいね」がついたよ。

中学に入学

学校を休むようになった。「登校しても誰とも話していない。」と言う。

久しぶりに学校に行き、教室に入ろうとすると、みんながこっちを見た。その目が怖くて入れなかった。



バスの運転手が他の乗客を大きな声で怒ったのを見て、もう乗りたくないと思った。バスに乗るくらいなら遠くても歩いていく。

話すことや字を書くことは苦手。  
パソコン入力はちょっとやってみたいけど…

「こどもサポート」ではパソコン入力で、漢字を使って作文を書くようになってきた。中学にはあまり行けなくても、「人と関わりたい気持ち」は言葉の端々に感じられた。

ぼくはしゃべらないし、マスクをしていると目しか見えないから、よく知らない同級生は怖いと思うかもしれない。目は、できるだけ笑顔になるように意識している。



友達が一人いる。その子は僕に話を聞いてほしいと思っていてから、僕が学校に行くと喜ぶ。僕は黙って聞くだけでしゃべらないけど、その子の話を聞くのは楽しい。



中学2年生 「接客業につきたい」と思いのきっかけとなる出来事があった。

おかあさんとボランティア活動に参加した。初めて会う大人の人たちと一緒にやるから、初めに自己紹介することになって、すごく緊張した。でも、頑張っって自分の名前と『よろしくお願ひします。』が言えた。僕のことを知らない初対面の人ばかりだったら、僕は話ができます。（Aさんの学習の記録より）

中学2年の終わり

次年度発行するサポートセンターの広報紙の「来所している子どもの声」の欄に、Aさんも書いてみないかと声を掛けた。



なにを書けばいいのかな

それなら書けます。将来は飲食業がいいと思っています。

お店で「いらっしゃいませ」とか「何にしますか」とか言うのは得意です！

ここで勉強している感想とか、将来こうなりたいと考えていることとか…

(スタッフ)

知らない人と話すのは苦手じゃないの？

あれ？接客は苦手だったのでは…

(スタッフ)

<広報紙「波紋」に書いたAさんの声> 「将来の仕事」

ぼくは将来、接客業につきたいです。理由は、「いらっしゃいませ」とか「何にしますか」などと言うのがおもしろいからです。仕事で知らない人と話すのは、自信があります。学校では人見知りだけど、本当は話すのがとくいです。

バイトができるようになったら、インドカレー屋で働く予定です。初めて会う人の集まりで自己紹介をする時、「最初が肝心」と母に言われました。ぼくもそう思うので、バイトの時も、初めの挨拶を元気よくやりたいと思います。

ふりかえって

「あれ？」と思った言葉が発せられるまでに、ふり返ってみるとAさんは様々な経験を積み重ねていました。自己表現したい意欲はあっても不安が大きく、家族や安心できる場しか思いを話せないように見えたAさんに、広報紙の原稿を依頼することは、負担が大きすぎるのでは、という不安もありました。しかし、Aさんの場合は、作文という表現手段を得るきっかけとなりました。また認めてくれる家族が大きな支えになっていると感じました。

スタッフは、Aさんの話を聞くことで、心に抱えている様々な思いに気づきました。そしてそれが、子どもの成長を応援することにつながりました。

## 事例7 「これ、なんだったっけ？」と言えた！（中学1年）

Aさんは、小3の時、学習についていけないことに気づき、自信がなくなり不登校になりました。勉強の遅れを心配して4年になって通所を開始しました。

「ここでやりたい学習がある？」と聞くと、即座に「漢字。書くことはできないけれど、読むことは、3年の漢字までは完璧。漢字、やりたい」と自信ありげに言いました。でも学習を始めると、読めない漢字が出てきます。すると汗がだらだら出て、「かゆい、かゆい」とかきむしる。

そんなことが続いたある日、読めない漢字を指さして「これ、何だったっけ？」とすぐに聞いてきました。「分からないことが初めて聞けた！」と思いました。

漢字やりたい

ここでどんな学習がしたいのと聞くと、自信ありげに「漢字！」と答えた。どのように学習を進めたら良いかと迷ったが、漢字は自信がありそうだから、自信のあるものから始めようと考えた。

始めてしばらくは順調に学習が進んでいった。何回目かの学習から、読めない漢字が出てきて、そのたびに首の辺りからジンマシンが出始め、腕の方まで赤くなり、我慢できずにかきむしるようになった。



暑い、暑い・・・  
かゆい、かゆい・・・

暑いとかゆくなるんだね。



(スタッフ)

あまりにもかゆがるので、学習支援者は団扇うちわを持ってきてあおいだ。

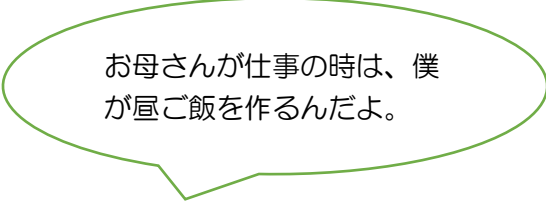
しばらくあおいでいると、かゆみは治まっていくようだった。そんな状態が、それ以降何回か続いた。読めない漢字が出てくるたびにジンマシンが出て、Aさんはとてもかゆがった。

母親は、気温の変化、暑さに弱いと言っていたなあ。クーラーが入っているけど、そんなに暑いのかな？それとも、学習することが辛いのかな？ストレスからくるジンマシンなのかな？読めない漢字が出てくると、かゆくなる。「分からない」と言えないからかな？

かゆい・・・  
トイレに行きたい。




かゆみがおさまると、水を飲み、トイレに行く。その状態が半年以上続いた。落ち着いてから読めなかった漢字をスタッフが読んで、その使い方の場면을提示した。また、一緒に読んで使う場면을話し合ったり、使う場면을Aさんが言葉にしたのをスタッフが書いたりした。



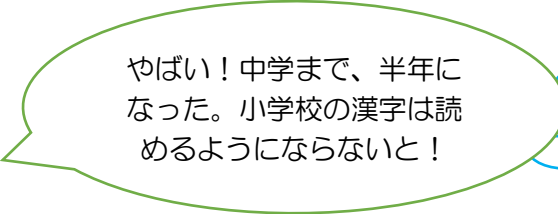
お母さんが仕事の時は、僕が昼ご飯を作るんだよ。

学習を続けるうちに、初めて自分から家族の話をした。家族のことや家庭での様子も。「頼もしいお兄さんだね」と伝えたと、嬉しそうな様子も見られ、家庭での自己肯定感は低くないと感じた。時間の経過とともに、打ち解けて話せるようになっていった。

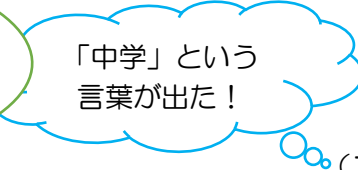


これ、何だったっけ？

読めない漢字の読み方を「これ、何だったっけ？」と、聞いたので即座に読み方を教えると「そうだった！」と答えた。汗も「かゆい、かゆい」もなく「3年の漢字までは完璧。」と自信ありげに言った。それ以後、読めない漢字が出てきても質問ができるようになった。やっと、「分からない」と言えて、リラックスして学習ができるようになった。



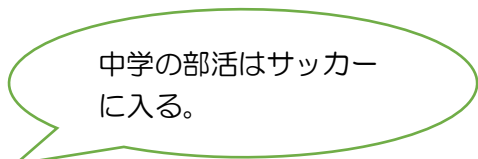
やばい！中学まで、半年になった。小学校の漢字は読めるようにならないと！



「中学」という言葉が出た！

(スタッフ)

学習が始まる前に、自分で学習する範囲を決めて取り組むようになった。休憩を取らず、いっきに、自分のやろうと決めたドリル学習を完成すると、満足げに「ノルマ達成！」と言った。読めない文字が出てくると、自分からパソコンで調べるようになってきた。



中学の部活はサッカーに入る。

土日は、父親とサッカーを始めた。部活はサッカーにしたいと話した。支援者が話題にしてはいけないと思っていた中学校の話を自分から始めた。この言葉を聞いて、中学校は登校しようと考えていることが伝わってきた。

### ふりかえって

Aさんにとって、学校で分からないことがどんどん増えていくことは、ジンマシンが出るほどのストレスでした。不安な毎日を過ごしていたのだと推察されました。サポートするスタッフは、かゆがるAさんのそばで、かゆみや、汗が落ちつくのを待ちました。好きなゲームやバスケットボールの話をしながらかつことが、Aさんのペースに合い、安心して自分が出せるスタッフとの関係ができたと考えています。「これ、何だったっけ？」という言葉を見た時、スタッフは「『分からない』と言えた！」と思いました。「分からない」という気持ちを言葉にできて、ほっとした様子でした。「分からない」と不安を抱えていたAさんが、自分のペースで学習するうちに安心感をもち、自分から「分からない」と言えるようになりました。

「分からないこと」を聞いて「分かる」楽しさを感じたことが、主体的な学習や中学への思いが語られることにつながったと考えています。

## 事例8 「ここがわからない」と言うようになった！（中学1年）

こどもサポートの通所が決まり数学の学習を始めた10月、Aさんは、「ぼくは学校に行かなくても自分で進めていたので、1年生の勉強はもう終わります。2年生や高校受験のための問題集をやっているからそれをやりたいです」と言いました。学習担当は、「あれ？」と思いましたが、「自信があるようだし、まずは子どもの『できる!』という言葉を尊重して、Aさんがやりたいところから始めてみよう」と学習をスタートしました。

不登校になってから家に引きこもりがちだったAさんがやっと外に出る気になって「こどもサポート」に来た。学習には前向きで最初から2教科希望だが、面談ではあまり自分の気持ちを出さないAさんだった。面談した相談担当は、保護者からの情報を2人の学習支援者と共有するようにし、複数の目でAさんの支援を進めるよう心がけた。

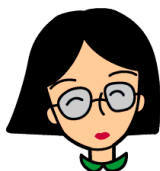
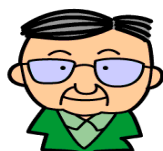


それでも初めは保護者から「やっぱり今日は行けない。」という連絡が来ることが多く、なかなか安定して通うことができなかった。

学習が始まってしばらくして、2人の学習支援者にAさんの様子を聞くと…

数学では、本人が希望する難しい問題をやってみただけ基礎がわかっていないのでできない。でも行き詰っても「ここがわからない」と言わないんだよ。できないことを認めないと、なかなか先に進めない。自信をなくさないようにしながらも、できていないことはしっかり伝えるようにしている。（学習支援者）

英語も同じ。上級の問題を頑張ってみようとするけど基礎がないとできないよ。必要な基礎は、やらなければ無理だということをはっきり言っているよ。（学習支援者）

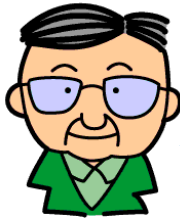


「できない」や「わからない」を自分から言えるようになるといいけど、まだ弱みを見せられないのかな。ようやく外に出られるようになったAさんが、また自信を無くすのは心配だけど、のりこえてほしいね。（相談担当）

このように、Aさんの今の状況や心の在り方について、相談担当と学習担当が情報を共有し、保護者にも様子を伝えながら、Aさんが安定して通えるようになるのを見守った。

## Aさんの変化

不安定な時期は半年ほど続いたが、ある時から安定して来所するようになった。



最近、「ここがわからない」と自分から言うようになってきたよ。理解もよくできている。柔軟な考え方ができるようになってきたね。

最近、学習以外のことも話すようになってきた。外部の模擬試験も受けて力試しをしていると話している。勉強が終わった後、短い時間だけど、自分が将来やりたい仕事とか、趣味の話もしている。そんな話をするようになったところから学習の様子も変わってきたかな。

### 2人の学習支援者に共通する子どもとの関わり

まず子どもの言葉を聞き、Aさんの気持ちを尊重しながら、わかっていないところははっきりと指摘して、基礎の確認を丁寧にするようにした。

学習が終わった後に少しずつ自分のことを話し始めるようになって、学習に関係ないアニメや鉄道の話も出るようになった。いろいろ知識もあって、話を聴くのが楽しかったよ。

そうか、わかった！これはできるようになった！次はここがわからないんだ…



鉄道が好き。将来は鉄道にかかわる仕事がしたいんです。

### ふりかえって

Aさんの場合は、「できないことがある」ということが受け入れられるようになって、学習担当の言葉が耳に届くようになりました。スタッフと安心して話せるようになる頃には、精神的にも安定してきました。スタッフが、Aさんの不安な気持ちに寄り添いながら、必要な学習を丁寧に積み重ねていったことが支えとなり、手ごたえや達成感を持ち、できないことにも向き合って乗り越えようとする気持ちが生まれました。

「子どもの声を聞き、尊重しよう」とするスタッフの姿勢が、子どもが安心して自分の気持ちを表すことができる場をつくりました。そのような場で、苦手なこととも向き合い、自信をつけていくAさんの姿が見えました。



## 事例 9 「やめたい!!」と訴える（中学3年）

ある日の朝、突然の電話に驚きました。

本人から、「この間の勉強は、私には、無理です・・・」集中して学習していたのにどうしてだろうと疑問を抱きながら聞くと、「勉強があわないので、やめていいですか?」と小さい声だけど強い気持ちを感じました。今まで、自分から話すことがなくスタッフが話しかけても頷くことがやっとでした。

Aさんの思いを第一に考え、前向きに受け入れ続けてきた結果、数か月後Aさんは、自分の好きなことを見つけ、笑顔で「さようなら!」と挨拶ができるようになりました。

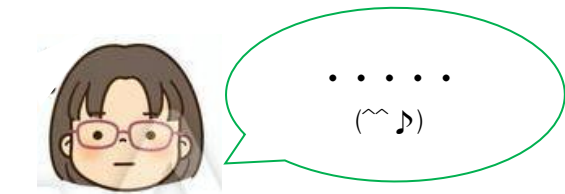
Aさんは、今まで自分の思いを表現することがなかったので、スタッフからすると勇気を出して言っているのではないかと察した。電話の向こうから聞こえてくる言葉に、何か言ってはいけないことを言わなければならない緊張感のようなものが言葉の端々から伝わってきた。

初回の面談の時は、母親の後ろに隠れるようにしていた。歩く姿も席についてからも下を向き、無表情であった。目を合わせることもなく、聞いたことには、声を出さず頷くだけであった。「無理なくていいよ・・・ゆっくりやりましょうね」と言ったとき、初めて目を合わすことが出来た。帰るときは、Aさんが先頭になってうつむき加減で玄関に向かった。見送るスタッフに軽く会釈をしたが無表情で精一杯の様子であった。

学習支援が始まると、



初日、「こんにちは」と声をかけても黙ったままで目を合わせず、じっと立ちすくんでいった。学習中も、頷くだけで声を出すことがなかった。出された課題は、ゆっくり取り組んでいた。



ある日、「こんにちは」と言うと目を合わせ、ニコツとした。「頑張っているね」と言うと、目で、「うん!来たよ。」と表現しているようであった。

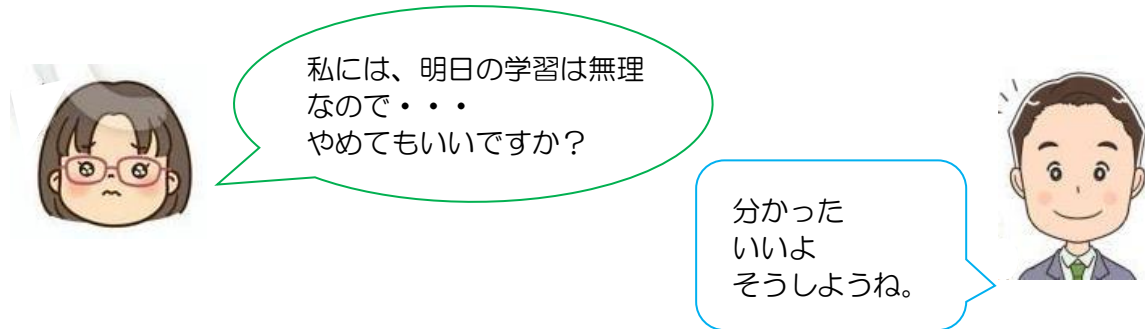
スタッフは、毎回笑顔で挨拶の言葉をかけ続けた。少し笑顔が見られるときもあったが、帰るときは、無表情で「頑張ったね!さようなら」「またね」と声をかけても逃げるように帰ることがあった。母親に帰宅してからの様子を聞いたり、どう対応したらいいのか相談したりした。自分の言葉で自分の気持ちを表わすことが苦手で、母にも自分の気持ちを表すことは少なく、嫌になると黙って自分の部屋に閉じこもってしまうことが多々あるそうだ。

1年が経過し、中2の12月頃、週1回の学習支援を中3になってから、もうひとつ教科を増やしたいと母から言ってきた。理由を本人に聞くと、呟くような小さな声で答えた。



高校へ行きたいから、他の勉強もしてみたい。

中3になり週2回の学習支援が順調にしていると思っていた時

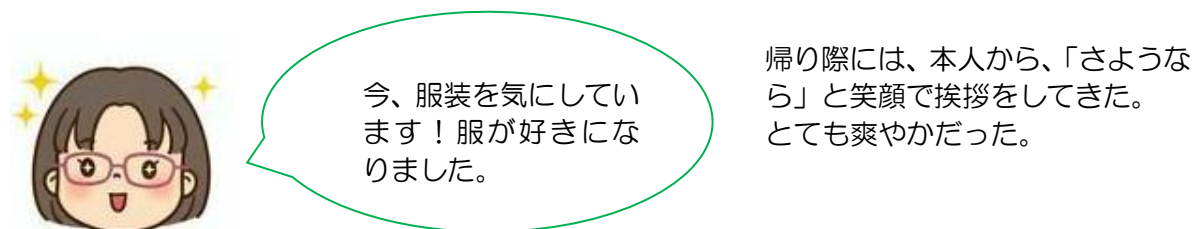


Aさんの思いを第1に考えて、週1回の学習支援に戻すことに変更した。

母は、「子どもに任せているので、子どもがやめたいと言うのであれば仕方ありません」「私は、仕事をしているので、本人が決めたことなので・・・今後ともよろしく願いいたします」と話してくれた。

Aさんにとっては、学習日を増やしたことが負担だったのか。増やした教科になじめなかったのかは分からない。それを聞きとるよりも、自分の意思を表現することがほとんどなかったAさんが自分の思いを表現したことを大事にした。「自分の思いは、言葉にしないと相手に分からないよ」と折に触れ話す機会を増やし、少しでも自分の思いを表現できた時には褒めて自信に繋げるように心がけてきた。

ある時、「素敵な色のシャツだね」「良く似合っているね」と声をかけると嬉しそうに、



その後、Aさんは、相手の顔を見て挨拶を交わすことが多くなった。週2回の学習を、週1回に変更することで本人の気持ちにゆとりがでてきた。また、本人の気持ちを前向きに受け入れたことで、会話する機会も増え、笑顔も増してきた。学習の取り組みにも変化がでて、今まで出された課題を仕方なく取り組んでいたが、自分から進んで取り組む姿に変化していった。

### ふりかえって

「やめたい!!」という子どもの声に驚きました。勇気のいる言葉だったと思います。面談の時には、母が代弁し、母の背中から声を出す姿でしたが、「やめたい!!」と電話してきたことは、素晴らしい成長だと思います。子どもの思いを聞かずすぐに助言をしたり、寄り添い過ぎたりすると子どもの負担になることがあります。また、子どもたちは、周りの大人に気を遣い過ぎて疲れてしまうこともあります。Aさんの場合、発した言葉が受け入れられ、前向きに取り組めたことが自信につながったのだと思います。自分の思いを表現することで、居心地のよい環境を自らみつけることが出来たのは大きな成長でした。

## 事例10 ミニ事例 子どもの声とスタッフの思い

こどもサポートでは、毎日、たくさんの子どもたちの声が聞こえます。スタッフがその変化に気づく瞬間も数多くあります。そこで、スタッフがどんな子どもの姿を「変化」としてとらえたか、それにどのような思いを持ったか聞きました。

同じような子どもの姿に気づいても、スタッフの思いには少しずつ違いがあり、その成長のとらえ方も様々です。ここでは、子どもの変化の瞬間に気づいたスタッフの思いを集めました。



子どもの変化



と スタッフの思い

自分なりの関心を失わないでいる！  
これは生きていく力になる

学習していることと違って  
も子どもの話を聴くことで  
話す中身も深くなる  
聴くことを大切にする



- ・「外出した時のこと」「今日これからの予定」など個人的な話をするようになった。
- ・アニメやゲームなど自分の好きなことを話すことが増えてきた。

人間関係ができてきた  
子どもが人との関わりに対して前向きになってきたように感じる

学習以外のことで会話が续くようになった この場に慣れてきたのか安心して気持ちの変化が出せるようになって学習意欲にもつながる



- 自分の意思をはっきり言うようになった
- 「わかりました」「できました」と答えていた子どもが、「できません」「わかりません。」「疲れました」と気持ちを伝えた

安心して自分の思いが言えるようになったのは、ここが「居場所」となってきたからかな

こちらの期待や思いと違って、子どもが決めたことを否定しないでさりげなく受け入れてきた

自分のいうことを否定しないでちゃんと聞いてくれる大人がいる、と感じて安心したようだ

自分のことを話したがいなかったが、一般論として話をするようになった  
客観的に様々な立場で考えられるようになって話題が広がった



- 「学校だったら…」「社会にでたら…」
- 「先生はどちらが都合いいですか？」
- 「これでいいかな。」という顔でスタッフを見るようになった

自分のペースでやりたいと言っていたが、適切な助言を求めるような表情がみられ、助言を受け入れるようになってきた

自分が伝えたいことや自分の希望ばかりを話していた子どもが、こちらの都合を聞いてきた！  
相手を気づかう言葉に成長を感じた



- 自分が抱えている問題を抱えきれずにみんなの前で話してしまった。

自分一人で抱えていたら自分が壊れてしまうと切羽詰まっていたのだろう

みんなが自分の状況を知っているということで緊張が取れた様子  
スタッフも時々話題にでき、一人で抱え込むことから解放された

学習がわかるようになって自信がついたようだ  
人との関わりにも自信が見られる



- 初対面のスタッフともはなしができるようになった。
- 日頃言葉が少ないが、嬉しいことがあった時に帰り間際にしっかり声を出してスタッフにそれを伝えた。

子どもがうれしかったことを聞かれて話すのではなく自分から噴き出すように話した 自分を認めてほしいという気持ちを表現できたのは素晴らしい力だと思った



- 今日行けないので、代わりに行ってもいい日はありますか？」
- 「今日は昼ご飯を買いに行ってくる！」と自分でこどもサポートにいる時間を延ばした。

今までは休みの連絡だけだったのに振り替えを聞くなんて大きな変化！  
「学習に来たい」という気持ちを感じた

「関わりたい人がいる」と感じて、子ども自身が滞在延長を選択した  
ここが子どもにとって居場所になりつつあるのだろう



## Ⅳ 研究のまとめ

### 1 2年間の研究をふり返って

「子どもの声から不登校を考える～子どもの成長を応援する関わりをするために～」というテーマで、2年間の研究を進めてきました。研究方法として、「アンケート調査」「実践事例研究」を2つの柱にして取り組んできました。令和4年度のまとめで、「研究部員だけでなく、こどもサポートで子どもたちと関わっているスタッフからも子どもの声を集めていきたい」と記しました。令和5年度は、2年間の研究の方向として共有したテーマについて、スタッフの意見を聞きました。そこから、日々、スタッフがどんな思いをもって活動しているかが見えてきました。

テーマについて記述されたスタッフの思いを、「子どもの声を聞く」「子どもの成長を応援する関わり」「子どもとの関わりで大事にしたいこと」の3つの観点で整理しました。

#### 子どもの声を聞く

- 「子どもの声に耳を傾ける」ことは、不登校を多面的に捉える視点として欠かせないと思う。
- 「声を聞く」難しさを感じる。「聞こえてきた声」にどう反応するか、どう対応するかという支援者自身への問いかけのようにも感じている。
- 子どもが発した言葉の軽重をその場で判断できないこともあるが、注意深く耳を傾けていく。
- 子どもの声やつぶやきを拾って、支援に役立てることは大切だと思う。しかし、日々刻々変化する子どもの声の全体を聞き取ることは難しい。ほんの一部の声だけに左右されてはいけないだろう。
- 子どもは日々変化する、成長しているので、先入観なく、子どもの声を聞き続けることを忘れてはいけないと実感している。
- 話だけでなく、表情や姿勢からも声を捉えるように努力したい。



#### 子どもの成長を応援する関わり

- 私達大人は、みんな子どもを応援したい気持ちで接していると思います。ただそれが子どもにとって応援と感じるかどうかは違うように思います。逆に圧力と感じたり、押しつけと受け取ったりする場合も多くありそうです。大人が「聴く」だけで、子どもは自分で自分自身を成長させていけるのではと考えます。
- 子どもの状況や思いを、周囲の者が理解し受容することで、一定の安定を得ることができるだろう。
- 言葉にならない声、気持ちを言語化できるよう、意味づけ、価値づけをしていきたい。
- 声に出さずとも、しぐさ、動き等で子ども達の思いを分かるようにしたい。発声、発語が少ない子に、子どもを迎える側が「～だね」と確認し、意思、気持ちのバックアップをしていきたい。
- 子どもの活動を近くで見守り、本人のやりたい、したいという意味が、分かれば、最大限の支援をするよう心がけています。
- 子どもの様子や状況から、手探りだが、その子に合う応援の方法を模索しながら、成長を応援したい。

## 子どもとの関わりで大事にしたいこと

- 先入観をなくして、子どもと出会うことの大切さを、日々感じています。
- 接する時間が短い中、子どもの内面を大切にしたいと思うが、なかなか難しいと感じます。内面を大切にするためには、子どもの声、姿に目を向けてとらえていくことが大切だと思います。
- 「子どもの声」をどう聞きとり、感じ取っていくか、子どもの本心を知るには、少し時間が必要に思います。その時間を大切にすることで、心が開き、寄り添え、本人への言葉かけもできるのではと思っています。
- 「子どもの声から不登校を考える」というテーマはとても難しい。子どもの小さな変化を見逃さないようにしていきたい。
- 学習や日常の会話を、スタッフと子どもが1対1で、真剣に楽しくできることは、お互いの成長に大きな力と自信になっていると思う。

研究方法の一つとして、今年度も子ども・保護者を対象にアンケート調査を実施しました。

子どもアンケートの実施にあたり「子どもの声を聞くのにアンケートは適しているのか」「どんな聞き方がいいのか」と、話し合いを重ねました。結果的には、「一人一人に適した方法で声を聞く」ということにつながりました。そのため、自由記述欄に記述された言葉や、スタッフの問いかけに応えた声には、多くの子どもの思いが表現され、実態を把握する手がかりとすることができました。

保護者アンケートでは、今年度はWeb調査（グーグルフォームによる）を導入しましたので、自由記述欄に多くの保護者の声が集まりました。文部科学省の基本的な方針の変化もあり、社会の中で不登校に対する考え方も変わってきているのを感じています。それに伴い、保護者の考え方も様々に変化しています。保護者にも、子どもの声に耳を傾け、子どもにとって今、何が大切かを考える姿が表れてきました。

また、コロナ禍という特別な時期を過ごし、子どもも大人も影響を受けていることも見過ごせないと感じています。マイナスの影響だけでなく、一人一人に適した学び方を模索するといったプラスの変化も見られます。これについては今後も注意深く見守っていきたいところです。

これらのアンケート調査は、令和元年度から行っています。継続して調査することによって、変化や傾向などが見えてくることが多く、今後も続けていきたいと考えています。

研究のもう一つの方法は、「実践事例研究」です。これは、これまでの私たちの研究で最も大切にしてきたことです。重要なのは、実践事例研究が、限られた時間・場所を設定して行われているのではなく、日常的に行われていることです。日々子どもと関わるスタッフ同士が密に情報交換し、自分の受け止め方を見直し、子どもの課題を共有し、対応を相互に検討していること、それこそが実践事例研究の成果です。

事例10で紹介した「ミニ事例」や、研究テーマについての意見交換からわかるように、スタッフは、子どもの声を聞くことを大切にしています。「子どもの声を聞こう」という姿勢が、スタッフ全体に浸透してきました。「子どもの声を聞こうとする人がいる場所」が、子どもにとって来やすい場所、居場所になっています。だからこそ、そこで子どもの変化に気づき、どう関わっていくかを日々リフレクションすること、それもスタッフの役割です。スタッフから集まった言葉は、まさに「子ども達の声を聞き、実践につなげる」、その実践報告でした。スタッフとして子どもに関わる全員が研究の実践者であることを再確認することができました。

2年間、研究を継続する中で、子どもに関わるすべてのスタッフが「子どもの声を聞く」という共通

理解に立って、皆が互いに協力しながら、子どもを応援していることが、研究の大きな成果だと考えています。

また、研究のまとめとして報告書を作成することは、ここでも自分たちの関わりを見直し、子どもに関わるスタッフ全員と、その成果や課題を共有する貴重な機会となりました。掲載した事例では、子どもの声が本当に聞いているのだろうか、応援する関わりはこれでいいのか、実践者の不安は消えることはありません。しかし、実践を見直し検討することが、子どもを応援する関わりにつながるのです。

これからも、子どもたちとの日々の関わりの中で、子どもの声に耳を傾け、子どもにとってよりよい応援につながられるように、スタッフ一同努力していきます。

## 2 今後の課題

### (1) テキストマイニングの活用

今回、子ども・保護者アンケートの自由記

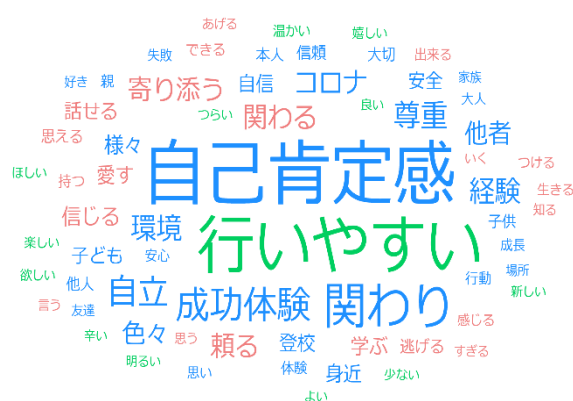
述をまとめるために、「テキストマイニング

(KH Coder 樋口耕一・開発 \*注)」の活用を試みました。右の図は、保護者アンケートの結果から作成されたもので、「自己肯定感」「行いやすい」という言葉が大きく表示されています。この図から読み取れることとして、自己肯定感を高める成功体験が得られる場、

行いやすい場に対する関心の強さがうかがえます。

今後、自由記述や問わず語りの文章などに対して、テキストマイニングの手法を活用し、より有効な情報を収集し、子どもや保護者の不登校に対する思いや、声にならない声をとらえることができると期待しています。

(\*注) 樋口耕一 他 (2020) 「KH Coder OFFICIAL BOOK II 動かして学ぶ!初めてのテキストマイニング」ナカニシヤ出版



### (2) 様々な課題に対応する多様な支援の充実

「子どもの声にどうこたえるのか、自分がいつも問われている」というスタッフの言葉がありました。聞こえたと思う声が、子どもの本心なのか、自分の受け止めでいいのか、常に気をつけていることが必要です。そのような関わり積み重ねて、子どもが安心できる場所、学習する場を提供できるのです。しかし、聞き取りにくい声もたくさんあります。こどもサポートに登録しながら通所できず、家に引きこもる子どももいます。また、通所が途絶え、学校や他の居場所にもつながっていない子どももいます。さらに、「どこにもつながっていない」という子どもが多いことも現実です。

そのような子どもに対して、家庭訪問などアウトリーチの支援実施のための人材確保が一つの課題です。オンラインを活用した相談の窓口の拡大や学習の実施も考えていきます。

また、公立学校、区役所などとのこれまでの連携を継続しながら、さらに様々な機関・施設との連携を深めることが、支援の充実につながると考えます。最近、放課後デイサービスや民間のフリースペースが数多く設置されています。そのような施設からの情報提供や、訪問による交流も活発です。様々な機関・施設との連携を生かして、より子どもに合った居場所・学びの環境をコーディネートすることにより、子どもの成長を応援する関わりにつなげていきたいと願っています。

## … 令和5年度 研究経過 …

### ◆研究部会◆

月 日	場 所	内 容
4月 5日	こどもサポート宮ノ下	前年度の振り返り・研究テーマについて
5月10日	こどもサポート宮ノ下	研究テーマ・研究方法・研究日程検討
6月 7日	こどもサポート宮ノ下	研究テーマ・研究内容の検討
7月 5日	こどもサポート宮ノ下	研究テーマ・研究方法の検討
8月 2日	こどもサポート宮ノ下	研究テーマの検討
9月 6日	こどもサポート宮ノ下	サブテーマ・アンケートの検討
10月 4日	こどもサポート宮ノ下	シンポジウム案の検討 実践事例の持ち寄り
11月1日	こどもサポート宮ノ下	子どもの声の集め方検討
12月6日	こどもサポート宮ノ下	シンポジウムの持ち方検討 アンケート実施へ
1月10日	こどもサポート宮ノ下	報告書原稿の最終確認と報告会の役割分担の検討
1月31日	こどもサポート宮ノ下	報告内容の検討 シンポジウムの確認
2月28日	こどもサポート宮ノ下	研究の振り返り・次年度の研究について

### ◆研究協議会◆

月 日	場 所	内 容
6月16日	川崎市教育会館	研究テーマ・研究方法の検討
8月25日	川崎市教育会館	研究テーマの検討
10月 6日	川崎市教育会館	実践事例の検討 子どもの声の集め方
12月15日	川崎市教育会館	研究報告の持ち方 研究報告書作成
2月 3日	川崎市教育会館	研究報告会での報告内容の検討

### ◆研究協議会の委員◆

○委員長 岡田 守弘 先生（ 横浜国立大学名誉教授 ）

山田 雅太（サポートセンター理事長）	保崎 万里（サポートセンター副理事長）
海老沢 衛（サポートセンター事務局長）	東條 光一（サポートセンター総務部）
齋藤 正（こどもサポート宮ノ下）	岸 秀子（こどもサポート宮ノ下）
井上なおみ（こどもサポート宮ノ下）	大久保 光（こどもサポート南野川）
渡辺 寿枝（こどもサポート宮ノ下）	紺野 義輝（こどもサポート旭町）